琉球大学学術リポジトリ

近代の沖縄県とバスク地方におけるアメリカ合衆国本土への移民の特性：国頭郡羽地村とビスカイア県ムヒカの比較を通じて

メタデータ	言語:
	出版者: 沖縄移民研究センター
	公開日: 2018-11-13
	キーワード (Ja): 出稼ぎ, 自由民権運動, 船員, 後続移民, 定住
	キーワード (En): Emigration, Democrat, Seaman, Chain Migration, Settlement
	作成者: 花木, 宏直, Hanaki, Hironao
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010081

近代の沖縄県とバスク地方におけるアメリカ合衆国本土への移民の特性
――国頭郡羽地村とビスカイア県ムヒカの比較を通じて――

花 木 宏 直

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．沖縄県とバスク地方の概要
Ⅲ．沖縄県出身のアメリカ合衆国本土への移民の行動
Ⅳ．バスク地方出身のアメリカ合衆国本土への移民の行動
Ⅴ．おわりに

キーワード：出稼ぎ，自由民権運動，船員，後続移民，定住

Ⅰ．はじめに

近代には，世界各地で海外を含む人口移動の活発化がみられた。とくに，本稿で対象とする日本の沖縄県と，スペインとフランスの国境に位置するバスク地方は，母国で独自の言語や文化を有する少数派集団と認識され，近代に北米と南米をはじめ各地へ多数の移民を送出した。また，現代では送出地域と移住先との強固な越境的ネットワークを構築し，両地域の協働により移民に関わるイベントを開催する等，多くの共通した特性をもつ。

近代の沖縄県とバスク地方から北米への移民については，日本の人文地理学をはじめ，さまざまな研究が行われてきた。まず，沖縄県では，沖縄県からの移民送出では最も早期にあたる 1899 年より移民がみられ，同年から 1941 年にかけて 20,118 人という世界で最も多くの沖縄県出身者の移住先となった，ハワイへの移民に関する研究が多く蓄積されてきた[1)]。そして，ハワイへの移民一世の特性について，当初は出稼ぎ目的であったが妻子を呼寄せ帰郷者が少なかったことや，主に甘蔗栽培の労働者に従事したこと，同郷者の紐帯が強く他府県出身者との交流が少なかったこと等が指摘されている[2)]。さらに，1992 年には現存する一世への悉皆的な聞き取り調査が行われ，甘蔗栽培の労働者からさまざまな自営業の経営者等へ職種が変化し，送金や第二次世界大戦後の救援物資の送付，一時帰郷等を通じて送出地域との紐帯を維持していたことが明らかにされた[3)]。一方，ハワイよりも早く 1889 年よりアメリカ合衆国本土への移民がはじまったが，ハワイより移民数は少なかった[4)]。しかし，1900 年に日本からアメリカ合衆国への直接渡航が禁止されながらも，ハワイやメキシコ，ペルー等からの転航により，継続して沖縄県出身者が移住した[5)]。つまり，アメリカ合衆国本土は，移民政策の影響により移民数は少ないものの，北米方面への移民にとって最終目標となる移住先として重要な存在であった。アメリカ合衆国本土へ

の移民については，概要をまとめた『北米沖縄人史』が 1981 年に刊行されている[6]。しかし，それ以外の研究は，1980 年代に移住した移民のライフヒストリーの検討や[7]，アメリカ合衆国本土の移民による送出地域への高額送金の存在を断片的に指摘したもの等に限られ[8]，研究蓄積が大変少ない[9]。これらの点を踏まえ，アメリカ合衆国本土における沖縄県出身の移民について，渡航に至った歴史的経緯や渡航前後の行動といった概要の基礎的な把握を進める必要がある。そして，後発ながら日本有数の多出地域へ展開するという沖縄県の移民送出の特性について[10]，研究蓄積が少ないものの重要な移住先であったアメリカ合衆国本土の事例を充実させることで，検討を深化させる必要がある。

次に，バスク地方では，1840 年代よりカリフォルニア州で発生したゴールドラッシュに伴い鉱夫等として移民がみられ，しだいに牧羊業に従事するようになった[11]。このため，移民研究というよりは農業地理学の視角から，バスク地方出身者の民族産業といえる牧羊業の経営実態や移牧のあり方[12]，通時的展開[13]の検討が行われてきた。近年では，バスク地方出身の牧羊業者を対象としながら，アメリカ合衆国本土への移住期間や連鎖移住，居住地の移動に注目し，移民研究の視角からの検討が登場している[14]。さらに，バスク地方出身者の集住地域に宿泊業が成立し，彼らのネットワークの拠点となったことや，集住地域の景観保全といった現代的展開についての検討も進められている[15]。一方，バスク地方や周辺地域の人口移動については，アメリカ合衆国本土と同じく農業地理学の視角から移牧の検討もみられるが[16]，バスク地方出身者というよりはむしろ，19 世紀末と 1960 年代におけるスペイン中西部からバスク地方への工業労働者の移住の増加が注目されてきた[17]。そして，このことに対する不安から，バスクナショナリズムが発生したと指摘されている[18]。しかし，バスク地方は工業地域であるにもかかわらず，工業労働者はバスク地方以外より受け入れられ，バスク地方出身者は工業に従事するのではなく海外へ移住することを選択したのか，十分明らかになっていない[19]。この点についても，バスク地方の中での移民送出の地域差に注目し，詳細に検討する必要がある。

以上の点を踏まえ，本稿は，近代における沖縄県とバスク地方からの移民送出について，主要な移住先の 1 つであるアメリカ合衆国本土への移民を事例に，送出に至った歴史的経緯や渡航前後の移民の行動の特性を明らかにすることを目的とする。方法として，沖縄県とバスク地方から，同じく農業地域に位置し，100 人程度の移民を送出した，国頭郡羽地村とビスカイア県ムヒカを選定し比較検討する。なお，バスク地方の地名について，スペイン語でのムヒカはバスク語ではムシカ，ビスカイア県都のビルバオはビルボをはじめ，スペイン語とバスク語で異なる名称をもつ場合がある。本稿では，日本でより一般的といえる，スペイン語にて地名を示すこととする。

Ⅱ．沖縄県とバスク地方の概要

1．沖縄県

沖縄県からの海外移民の送出については，学術研究や自治体誌をはじめ膨大な研究蓄積がみられる[20]。はじめに，これらの成果を踏まえ，沖縄県からアメリカ合衆国本土を中心に移民の概要を確認する。

沖縄県からの海外移民は，まず，1880 年代末よりアメリカ合衆国本土への移住からはじまった。1889 年に那覇の寄留商人の男子がアメリカ合衆国本土へ移住し，1896 年より首里の士族の男子が相次いで移住した。ただし，これらの移民は少数であった。

次に，1890 年代末から 1900 年代半ばにかけて，ハワイへの移住がはじまり，沖縄県からの海外移民が本格化した。1899 年には金武村の当山久三がハワイ移民を斡旋したことが萌芽となり，1904 年以降は寄留商人による海外移民の斡旋も隆盛し移住者が増加した。背景として, 1871 年の琉球処分により琉球王国が廃止され, 1879 年に沖縄県が成立した後，本土より官吏や教育者，商業者の移住が多くみられるようになり，沖縄県の社会・経済は本土出身者により担われていった。とくに，1892 年に鹿児島県出身の奈良原繁が沖縄県知事に就任したが，彼の進める土地政策への反発や参政権の確保等をめざし自由民権運動が盛んになった。そして，自由民権運動の中心人物であった当山や今帰仁村の平良新助等は，人口や食糧問題の解決と自由民権運動への疲弊から，海外移民を計画していった[21]。また，寄留商人も，海運業や砂糖商等からの多角的経営の一環として，海外移民の斡旋や移民への貸金業，移民用品の販売に従事した[22]。当該時期には，ハワイにとどまらず，メキシコやカナダ等へも移住した。これらの移民は，甘蔗等の農業労働者や鉱夫，鉄道工夫を経て自営業者として定住し，アメリカ合衆国本土へ転航する者も多くみられた。

続いて，1900 年代後半以降は，ハワイをはじめ北米移民が減少し，ブラジルをはじめ南米への移民が増加した。背景には，1908 年に日米紳士協約によりハワイへの移民会社の斡旋による移民送出が制限されたことや，アメリカ合衆国本土への転航が禁止され，移民会社が南米へ移住先を展開させたことが関わっていた。南米への移民も, 北米と同じく，農業労働者等を経て自営業者として定住していった。

さらに，1910 年代以降は，これらの移住先へ後続移民の送出が増加した。1924 年にアメリカ合衆国では移民法が制定され，ハワイやアメリカ合衆国本土への移住ができなくなった。しかし，1920 ～ 30 年代には，沖縄県にて「ソテツ地獄」といわれる天災等による経済的困窮が顕著化し，海外へ生活拠点を求め，父や夫等のつてによりアメリカ合衆国本土を含む各地へ移住した。また，遠洋漁業の隆盛とも関わり，東南アジアや南洋群島への移住も増加し, 当該時期には沖縄県からの移民数が最多となった。そして, 1940 年代以降，第二次世界大戦に伴い移民が減少した。

2. バスク地方

バスク地方からの海外移民の送出について，日本では，バスク地方の地域研究の一部として海外移民が検討されている[23]。一方，北米では，主にネバダ州立大学やボイジー州立大学のバスク地方出身の移民の研究の一環として，移民研究の視角から膨大な研究蓄積がみられる[24]。次に，これらの成果を踏まえ，バスク地方から北米を中心とした海外移民についても概要を確認する。

バスク地方からの海外移民は，まず，19 世紀以前より捕鯨に従事するため，ニューファンドランドやアイスランドといった北大西洋各地へ出漁した。同じく 19 世紀には，スペインの植民政策の一環として，中南米を中心に移民が増加した。背景として，1812 年にスペイン王国が成立し，バスク地方の郷士にはフエロスにより免税や兵役免除等の特権が与えられた。また，バスク地方は鉄鋼業をはじめ工業や鉱業が盛んであり，これらに従事する技術者も多くみられた。彼らを中心に，スペイン王国の支配層と協力し，船員や鉱山等の開発者，聖職者，貿易商，さらに征服者として移住した。

続いて，1840 年代以降，アメリカ合衆国本土への移民が増加した。当該時期には，アメリカ合衆国西部でゴールドラッシュが発生し，バスク地方出身者は中南米からアメリカ合衆国西部へ転航した。そして，ゴールドラッシュはすぐに終息したものの，彼らは羊毛や羊肉の需要拡大をみいだし，牧羊業に従事していった。また，1860 年代以降は大陸横断鉄道が整備され，バスク地方から直接アメリカ合衆国東海岸へ渡航し，鉄道に乗換えて移住することができるようなり，出稼ぎを目的として移民が増加した。一方，とくに南米においても，農牧業をはじめ労働力の不足が顕著化し，引き続き移民がみられた。

その後，アメリカ合衆国では，1924 年の移民法の制定による移住の制限や，1934 年のテイラー放牧法の制定により公有地での牧羊業ができなくなった。しかし，1930 年代以降も，とくにスペインのバスク地方からアメリカ合衆国本土を含む海外各地への移民が少なからずみられた。1937 年にスペイン内戦がはじまり，第二次世界大戦後はフランコ独裁政権が成立したため，送出地域での生活の制約を避け海外へ移住した。また，バスク地方特有のスポーツであるペロタの選手として渡航し，そのまま海外へ定住する者もみられた。1973 年にフランコ独裁政権が廃止されると，バスク地方では 1979 年にバスク自治州や 1982 年にナバラ自治州が成立して社会・経済が安定し，移民は減少した。

以上の点を踏まえ，沖縄県出身者とバスク地方出身者はともに，おおよそ 19 世紀後半から 20 世紀前半頃に，ハワイやアメリカ合衆国本土の開発に伴い，主に農業や牧羊業，鉱夫，鉄道工夫といった労働者として移住した。一方，沖縄県では琉球王国の廃止と本土出身者による社会・経済の抑圧の反動として，自由民権運動の担い手が移民のキーパーソ

ンとなった。また，バスク地方ではフエロス特権をもつ郷士がスペイン王国の支配層と協力し，植民政策の一環として移民がみられた。つまり，移民送出の契機について，母国への反発と協力という，対照的な展開がみられた。さらに，沖縄県では 1920 年代以降の後続移民の送出と経済的困窮との関わりや，バスク地方では 1930 年代以降の移民送出とスペイン内戦やフランコ独裁政権といった政治的影響との関わりがみられた。

Ⅲ．沖縄県出身のアメリカ合衆国本土への移民の行動

1．送出地域

続いて，沖縄県出身のアメリカ合衆国本土への移民に注目し，渡航前後の行動を検討する。図 1 は，『沖縄県史』に掲載された赤嶺康成氏所蔵「外国在住者調」をもとに，1935 年における市町村別のアメリカ合衆国本土在住者数を示したものである [25]。図 1 は，あくまで 1935 年当時の在住者を示したものであり，1935 年までに帰郷や死去した者については含まれていない。しかし，先述の通り，沖縄県出身者は移住先へ定住する傾向が強かったことから，多出地域の分布の傾向を把握する上では有効である。

図 1 より，在住者数が上位の市町村に注目すると，1 位は勝連村 324 人であり，2 位金武村 120 人，3 位本部村 86 人，4 位羽地村 78 人，5 位中城村 71 人，6 位名護町 66 人にて 50 人以上となっていた。つまり，本島中部の東海岸と，沖縄県からの海外移民の送出の先覚者となった当山の出身地である金武村，本部半島に多出地域がみられた。また，玉城村 20 人や小禄村 15 人に加え，アメリカ合衆国本土への移民を早期に送出した首里市 13 人をはじめ，本島南部においてもある程度の移民がみられた。なお，本稿で対象とする羽地村は，沖縄県からアメリカ合衆国本土への移民の多出地域であり，農業地帯である本部半島の東南部に位置する。また，図 1 の在住者数から帰郷者や死去者を勘案し，100 人程度の移民がみられたと推察される。

図 2 は，『名護市史』に収録された渡航者名簿をもとに，羽地村からアメリカ合衆国本土への移民 97 人のうち，渡航年次の判明した 92 人について，渡航年次をまとめたものである [26]。図 2 より，羽地村から最初のアメリカ合衆国本土への移民は，1902 年に直接アメリカ合衆国本土へ渡航し，1903 年にも 5 人が直接アメリカ合衆国本土へ渡航した。その後，1905 年には 14 人，1906 年には 9 人が，ハワイへ渡航後，アメリカ合衆国本土へ転航していた。また，1904 年や 1907 年にはメキシコやカナダへ渡航後，アメリカ合衆国本土へ転航する事例もみられた。ハワイからアメリカ合衆国本土への転航が禁止された 1908 年以降，移民は一度減少した。しかし，1912 年より，アメリカ合衆国本土に居住する父や夫の呼寄や，一時帰郷した彼らに同行する形で，妻子がアメリカ合衆国本土へ後続移民として渡航する事例が増加した。1917 ～ 18 年と 1920 年には，最大となる 7 人の渡

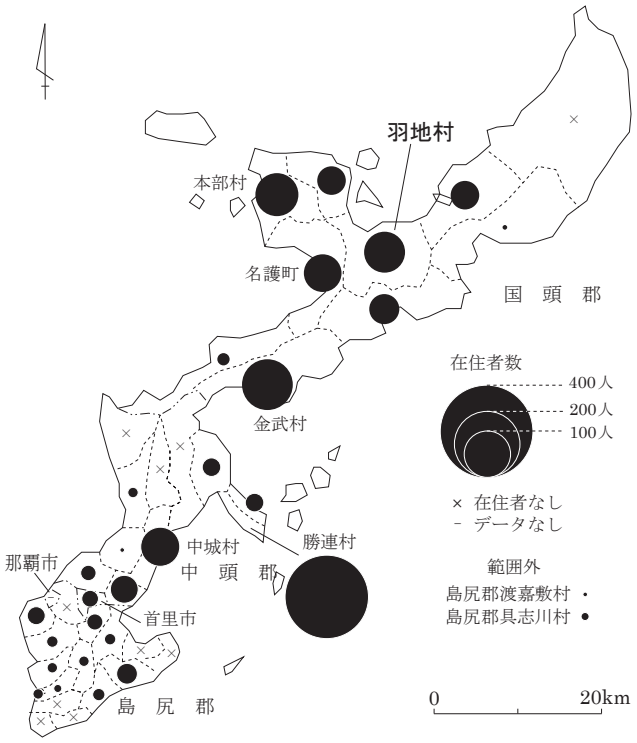

図 1　沖縄県におけるアメリカ合衆国本土在住者数—1935 年—

資料：沖縄県教育委員会編（1974）をもとに作成。

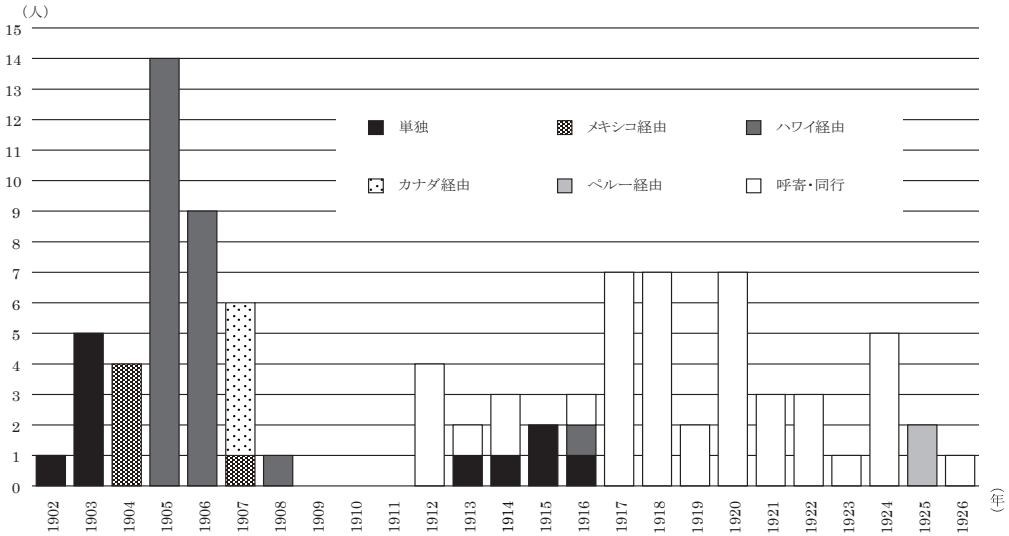

図 2　羽地村出身者の渡航年次

資料：名護市史編さん委員会編（2010）をもとに作成。

航がみられた。そして，1924 年に移民法が制定され，1927 年以降は移民がみられなくなった。なお，1925 年には，ペルーを経由してアメリカ合衆国本土へ転航する事例もみられた。

2. 渡航前の行動

表 1 は，『北米沖縄人史』や『名護市史』をもとに，羽地村出身者の渡航前後の経歴をまとめたものである[27]。まず，渡航前の居住地に注目すると，真喜屋地区 24 人，川上地区 18 人，古我知地区 13 人，我部地区 11 人にて，10 人以上の送出が確認できた。一方，稲嶺地区と饒平名地区で 3 人，親川地区と伊差川地区，呉我地区で 2 人，源河地区 1 人に加え，済井出地区と屋我地区では移民が確認できず，羽地村内でも移民数に地域差がみられた。なお，渡航前に羽地村以外に居住していた経験をもつ者は，資料上の制約もあり確認できなかった。

渡航前の生業について，羽地村で最初のアメリカ合衆国本土への移民として 1902 年に渡航した我部祖河地区出身の上間幸助は，渡航前に当山等と交流をもち[28]，教員として自由民権運動に従事した。また，1903 年に渡航した古我知地区出身の上間徳助や親川地区出身の平良盛栄，1906 年にハワイ経由で渡航した我部地区出身の喜屋武良助をはじめ，初期の移民には教員や自由民権運動を経験した者の比重が大きかった。

次に，1904 ～ 07 年にかけて，ハワイやメキシコ，カナダを経由したアメリカ合衆国本土へ転航する事例が多くみられ，大半は移民会社の斡旋によるものであった。ハワイへは主に農業労働者として大陸殖民 14 人，帝国殖民 3 人，皇国殖民と晩成移民 2 人，海外渡航と日本殖民 1 人，メキシコへは東洋移民により炭鉱工夫として 5 人，カナダへは東京移民により鉄道工夫として 5 人がみられた。転航のあり方について，1905 年 9 月に大陸殖民の斡旋によりハワイへ渡航した古我知地区出身の仲村権五郎は，1906 年 8 月にはサンフランシスコに居住した。仲村に限らず，転航した者の多くは数年以内にアメリカ合衆国本土に移住していることから，ハワイへは短期間のみ滞在したと推察される。また，メキシコでは，1904 年 7 月に東洋移民の斡旋により渡航した仲尾次地区出身の金城武吉，川上地区出身の安里太三，田井等地区出身の花城清吉が 1906 年 1 ～ 2 月に逃亡し，アメリカ合衆国本土へ入国していた。カナダについても，5 人ともカナダへ移住後の詳細な経歴は不明でありながら，後年アメリカ合衆国へ移住したとみられ，渡航者名簿や『北米沖縄人史』に氏名が登場している。つまり，メキシコやカナダについては，密入国としての転航が少なからずみられたと推察される。

続いて，血縁関係等のつてによる渡航について，1912 年以降の渡航の大半は，アメリカ合衆国本土に居住する父や夫の呼寄や一時帰郷した彼らに妻子が同行する後続移民であった。たとえば，1905 年にハワイへ渡航後アメリカ合衆国本土へと転航した真喜屋地区出

表１　アメリカ合衆国本土における羽地村出身者の経歴

氏名	戸主名	続柄	出身地	生年	渡航年次	経歴
平良林(森・盛)吉	平良徳助	弟	源河	1883	1905	1883年2月，生→1905年1月，渡航，ハワイ，大陸殖民→アメリカ→1915年10月，再渡航，アメリカ→1919年11月，再渡航，アメリカ→アメリカ，死去
島袋(島)庄寛	島袋庄四郎	五男	稲嶺	1901	1916	1901年7月，生→1916年10月，渡航，ハワイ，父の呼寄，学生→1923年，アメリカ，ワシントン，航空学校，学生，ヘンダーソン家，家事手伝い→1927年，ワシントン，航空学校，経営→1930年，農務省，勤務→電気器具店，周旋業，アパート，食料品店，日本食堂，経営
島袋善三郎	島袋善太郎	弟	稲嶺	1882	1905	1882年12月，生→1905年1月，渡航，ハワイ，大陸殖民→アメリカ→1913年7月，再渡航，アメリカ
島袋ナベ	島袋善三郎	妻	稲嶺	1885	1913	1885年1月，生→1913年7月，渡航，アメリカ，夫に同行
大城勘次	大城勘次	戸主	真喜屋	1877	1905	1877年6月，生→1905年1月，渡航，ハワイ，大陸殖民→アメリカ→1921年3月，再渡航，アメリカ，農業→アメリカ，死去
仲尾権次郎	仲尾権助	弟	真喜屋	1877	1905	1877年12月，生→1905年1月，渡航，ハワイ，大陸殖民→アメリカ→1914年4月，再渡航，アメリカ，鉄道工夫→1928年5月，再渡航，アメリカ，鉄道工夫→1930年代，帰郷
仲尾マカト(カマト)	仲尾権次郎	妻	真喜屋	1889	1914	1889年2月，生→1914年4月，渡航，アメリカ，夫に同行→1929年2月，再渡航，アメリカ
仲尾権英	仲尾権次郎	男子	真喜屋	1902	1918	1902年8月，生→1918年8月，渡航，アメリカ，父の呼寄→ロサンゼルス，農業，経営
平良覚助	平良覚助	戸主	真喜屋	1870	1905	1870年10月，生→1905年1月，渡航，ハワイ，大陸殖民→アメリカ→1930年代，帰郷→1942年頃，死去
平良覚吉	平良覚助	長男	真喜屋	1901	1917	1901年11月，生→1917年12月，渡航，アメリカ，父の呼寄→1920年12月，再渡航，アメリカ→ガーデナー，経営→1924年6月，再渡航，アメリカ→1946年，ワシントン，食料品店，経営，島袋庄覚の世話
平良　花	平良覚吉	妻	真喜屋	1906	1924	1906年4月，生→1924年6月，渡航，アメリカ，夫に同行→ワシントンｶ
大城善六郎	大城善六郎	戸主	真喜屋	1874	1905	1874年9月，生→1905年1月，渡航，ハワイ，大陸殖民→アメリカ→1918年4月，再渡航，アメリカ
大城善貞	大城善六郎	長男	真喜屋	1899	1918	1899年12月，生→1918年4月，渡航，アメリカ，父に同行→1933年，バサデナ，切花店，経営
宮平長平	宮平徳助	養子	真喜屋	1867	1905	1867年6月，生→1905年1月，渡航，ハワイ，大陸殖民，農業→アメリカ，モンタナ州→ワイオミング州，鉄道工夫→ネブラスカ州，鉄道工夫→デンバー→ロサンゼルス，農業，経営
大城勘光	大城勘吉	弟	真喜屋	1886	1906	1886年6月，生→1906年4月，渡航，ハワイ，皇国殖民→アメリカ，モンタナ州→ワイオミング州，鉄道工夫→ネブラスカ州，鉄道工夫→デンバー→アメリカ，死去
大城ナベ	大城勘光	妻	真喜屋	1890	1917	1890年7月，生→1917年1月，渡航，アメリカ，夫の呼寄→デンバーｶ
平良萬助	平良甚四郎	二男	真喜屋	1888	1906	1888年11月，生→1906年8月，渡航，ハワイ，海外渡航，農業→アメリカ，モンタナ州→ワイオミング州，鉄道工夫→ネブラスカ州，鉄道工夫→デンバー
源河孝吉	源河勝助	弟	真喜屋	1881	1907	1881年6月，生→1907年9月，渡航，カナダ，東京移民，鉄道工夫→アメリカ→1914年11月，再渡航，アメリカ→1921年3月，再渡航，アメリカ
宮平元保	宮平元保	戸主	真喜屋	1868	1907	1868年5月，生→1907年8月，渡航，カナダ，東京移民，鉄道工夫→アメリカ→1917年5月，再渡航，アメリカ→1926年9月，再渡航，アメリカ→アメリカ，死去
宮平トク	宮平元保	妻	真喜屋	1869	1917	1869年5月，生→1917年5月，渡航，アメリカ，夫に同行
宮平長助	宮平元保	長男	真喜屋	1905	1917	1905年4月，生→1917年5月，渡航，アメリカ，父に同行→1928年，ニューヨーク，宮商会，造花業，貿易商，経営→フロリダ州，隠居
金城福助	金城作次郎	長男	真喜屋	1891	1907	1891年9月，生→1907年9月，渡航，カナダ，東京移民，鉄道工夫→アメリカ→アメリカ，死去
金城作次郎	金城作次郎	戸主	真喜屋	1864	1920	1854年7月，生→1920年1月，渡航，アメリカ，長男の呼寄
上地福清	上地福清	戸主	真喜屋	1873	1914	1873年2月，生→1914年7月，渡航，アメリカ，銀行用務→アメリカ，死去
上地幸彦	上地福清	養子	真喜屋	1898	1918	1898年9月，生→1918年2月，渡航，アメリカ，養父の呼寄，農業
大城清平	大城勘吉	弟	真喜屋	1881	1907	1881年3月，生→1907年9月，渡航，カナダ，東京移民，鉄道工夫→アメリカ→アメリカ，死去
大城清栄	大城清平	長男	真喜屋	1902	1918	1902年10月，生→1918年5月，渡航，アメリカ，父の呼寄→1923年11月，再渡航，アメリカ→ロサンゼルス，農業，経営→1940年代後半，ロサンゼルス，農業，経営→アメリカ，死去
大城イネ	大城清栄	妻	真喜屋	1904	1923	1904年4月，生→1923年11月，渡航，アメリカ，夫に同行→ロサンゼルスｶ
金城武吉	金城武吉	戸主	仲尾次	1866	1904	1866年12月，生→1904年7月，渡航，メキシコ，東洋移民，炭鉱工夫→1906年2月，逃亡，アメリカ→1917年7月，再渡航，アメリカ
金城ナベ	金城武吉	妻	仲尾次	1897	1920	1897年10月，生→1920年4月，渡航，アメリカ，夫の呼寄
松田鉄五郎	松田鉄四郎	二男	仲尾次	1881	1904	1881年2月，生→1907年10月，渡航，メキシコ，東洋移民，炭鉱工夫→アメリカ→1925年6月，再渡航，アメリカ→1931年9月，再渡航，アメリカ，農業→アメリカ，死去
前田松太郎	前田清四郎	四男	仲尾次	1888	1907	1888年6月，生→1907年8月，渡航，カナダ，東京移民，鉄道工夫→アメリカ，モンタナ州→ワイオミング州，鉄道工夫→ネブラスカ州，鉄道工夫→デンバー→1910年代後半，インペリアルバレー，農業，経営→アメリカ，死去
平良森吉	平良元助	長男	川上	1879	1903	1879年1月，生→1903年2月，渡航，アメリカ
瀬底源太郎	瀬底松吉	長男	川上	1876	1903	1876年8月，生→1903年5月，渡航，アメリカ，修学→アメリカ，死去
金城時男	金城時男	戸主	川上	1879	1913	1879年3月，生→1913年3月，渡航，アメリカ，銀行用務
安里太三	安里太三	戸主	川上	1872	1904	1872年2月，生→1904年7月，渡航，メキシコ，東洋移民，炭鉱工夫→1906年1月，逃亡，アメリカ→1910年代後半，インペリアルバレー，農業，経営→アメリカ，死去
安里太一	安里太三	二男	川上	1898	1917	1898年6月，生→1917年10月，渡航，アメリカ，父の呼寄→アメリカ，死去
宮城幸栄			川上			→アメリカ
宮城幸音	宮城幸栄	三男	川上	1902	1920	1902年5月，生→1920年6月，渡航，アメリカ，父の呼寄
宮城幸奉	宮城幸栄	四男	川上	1905	1920	1905年3月，生→1920年6月，渡航，アメリカ，父の呼寄
平良宇志	平良松之助	弟	川上	1891	1908	1891年5月，生→1908年1月，渡航，ハワイ，兄の呼寄→アメリカ→1921年3月，再渡航，アメリカ→アメリカ，死去
平良マチ	平良宇志	妻	川上	1903	1921	1903年9月，生→1921年3月，渡航，アメリカ，夫に同行
平良喜助	平良兄助	三男	川上	1889	1906	1889年9月，生→1906年2月，渡航，ハワイ，皇国殖民→アメリカ→1922年1月，再渡航，アメリカ→鉄道工夫→アメリカ，死去
平良ウシ	平良喜助	妻	川上	1899	1922	1899年11月，生→1922年1月，渡航，アメリカ，夫に同行→アメリカ，死去
平良義吉	平良元助	長男	川上	1879		1879年2月，生→渡航→アメリカ→1921年2月，再渡航，アメリカ
平良森(盛)信			川上			→渡航→アメリカ→サンフランシスコ→アメリカ，死去
平良カメ	平良森信	妻	川上	1893	1924	1893年4月，生→1924年1月，渡航，アメリカ，夫の呼寄→サンフランシスコｶ→アメリカ，死去
平良森義	平良森信	二男	川上	1913	1924	1913年8月，生→1924年1月，渡航，アメリカ，父の呼寄→サンフランシスコｶ
平良マリ	平良森信	長女	川上	1921	1924	1921年9月，生→1924年1月，渡航，アメリカ，携帯児→サンフランシスコｶ
花城清吉	花城清吉	戸主	田井等(川上)	1878	1904	1878年11月，生→1904年7月，渡航，メキシコ，東洋移民，炭鉱工夫→1906年2月，逃亡，アメリカ→1922年6月，再渡航，アメリカ→ロサンゼルス，農業，経営→1940年代後半，ロサンゼルス，農業，経営→アメリカ，死去
花城カマド	花城清吉	妻	田井等	1898	1922	1898年3月，生→1922年6月，渡航，アメリカ，夫に同行→ロサンゼルスｶ→アメリカ，死去
国吉真善	国吉真孝	二男	田井等(伊差川)	1883	1906	1883年11月，生→1906年10月，渡航，ハワイ，晩成移民，農業→アメリカ→1922年8月，再渡航，アメリカ→アメリカ，死去
国吉　信	国吉真善	妻	田井等	1903	1922	1903年6月，生→1922年8月，渡航，アメリカ，夫に同行
仲尾善五郎	仲尾豊助	三男	田井等	1883	1905	1883年1月，生→1905年3月，渡航，ハワイ，大陸殖民，農業→アメリカ→1924年5月，再渡航，アメリカ→アメリカ，死去
仲尾ウシ	仲尾善五郎	妻	田井等	1905	1924	1905年10月，生→1924年5月，渡航，アメリカ，夫に同行

氏名	戸主名	続柄	出身地	生年	渡航年次	経歴
平良盛栄			親川			師範学校卒→小学校教員→渡航→アメリカ→1921年, エルセントロ, レストラン, 経営→1932年, エルセントロ, 死去
平良カメ	平良盛栄	妻	親川	1893	1926	1893年3月, 生→1926年9月, 渡航, アメリカ経由メキシコ, 夫の呼寄
宮里源吉	宮里源吉	戸主	仲尾	1862	1905	1862年1月, 生→1905年1月, 渡航, ハワイ, 大陸殖民, 農業→アメリカ, モンタナ州→ワイオミング州, 鉄道工夫→ネブラスカ州, 鉄道工夫→デンバー→アメリカ, 死去
宮里源清	宮里源吉	三男	仲尾	1899	1914	1899年6月, 生→1914年10月, 渡航, アメリカ, 父の呼寄→インペリアルバレー, 労働→アメリカ, 死去
宮里源徳	宮里源吉	四男	仲尾	1902	1918	1902年1月, 生→1918年3月, 渡航, アメリカ, 父の呼寄
伊豆味清吉	伊豆味清兵衛	長男	仲尾	1892	1916	1892年4月, 生→1916年6月, 渡航, アメリカ, 電気工学視察→アメリカ, 死去
翁長良彦	翁長良勲	二男	伊差川	1896	1925	1896年2月, 生→1925年10月, 渡航, ペルー, 弟の呼寄→アメリカ→ロサンゼルス, ホテル, 経営→アメリカ, 死去
翁長　幸	翁長良彦	妻	伊差川	1903	1925	1903年1月, 生→1925年10月, 渡航, ペルー, 夫に同行→アメリカ→, ロサンゼルス, ホテル, 経営→アメリカ, 死去
上間幸助	上間源吉	弟	我部祖河	1869	1902	1869年12月, 生→教員, 自由民権運動→1902年11月, 渡航, アメリカ, 学術研究→1903年, サンフランシスコ→1906年, ロサンゼルス, レストラン, 労働→ロサンゼルス, メキシコ転航者の受入→1908年8月, ロサンゼルス, 死去
宮城清良	宮城源太	二男	我部祖河	1882	1906	1882年7月, 生→1906年10月, 渡航, ハワイ, 帝国殖民, 農業→1919年12月, 再渡航, アメリカ→アメリカ, 死去
宮城源清	宮城源吉	長男	我部祖河	1889	1915	1889年10月, 生→1915年7月, 渡航, アメリカ, 語学研究→アメリカ, 死去
宮城ユキ	宮城源清	妻	我部祖河	1895	1918	1895年1月, 生→1918年9月, 渡航, アメリカ, 夫の呼寄
宮城善太	宮城善太	戸主	我部祖河	1881	1915	1881年7月, 生→1915年12月, 渡航, ハワイとアメリカ, 銀行用務→アメリカ, 死去
上間徳助	上間銀吉	弟	古我知	1878	1903	1878年6月, 生→師範学校卒→教員→1903年6月, 渡航, アメリカ, 学術研究→サンフランシスコ→1912年春, サンフランシスコ, 死去
仲村権吉	仲村権助	弟	古我知	1879	1905	1879年8月, 生→1905年2月, 渡航, ハワイ, 大陸殖民, 農業→アメリカ→アメリカ, 死去
仲村カメ	仲村権吉	妻	古我知	1889	1918	1889年7月, 生→1918年7月, 渡航, アメリカ, 夫の呼寄→アメリカ, 死去
仲村園子	仲村権吉	二女	古我知	1905	1921	1905年1月, 生→1921年2月, 渡航, アメリカ, 父の呼寄
仲村善吉	仲村右衛門	長男	古我知	1883	1905	1883年5月, 生→1905年2月, 渡航, ハワイ, 大陸殖民→アメリカ→アメリカ, 死去
仲村マツ	仲村善吉	妻	古我知	1882	1920	1882年10月, 生→1920年11月, 渡航, アメリカ, 夫の呼寄→アメリカ, 死去
仲村善宗	仲村善吉	長男	古我知	1903	1920	1903年12月, 生→1920年11月, 渡航, アメリカ, 父の呼寄→1930年代, インペリアルバレー, レストラン, 経営→アメリカ, 死去
仲村権五郎	仲村権助	長男	古我知	1888	1905	1888年12月, 生→1905年9月, 渡航, ハワイ, 大陸殖民, 農業→1906年8月, アメリカ, サンフランシスコ→ロサンゼルス, 学生→1919年, ロサンゼルス, 日本領事館, 嘱託→1924年, ロサンゼルス, 仲村事務所, 経営→1965年9月, ロサンゼルス, 死去
伊豆味孫次	伊豆味孫宗	長男	古我知	1883	1907	1883年12月, 生→1907年10月, 渡航, メキシコ, 東洋移民, 炭鉱工夫→アメリカ→1908年, アリゾナ州, 農園, 経営→1930年, フェニックス→1940年代後半～, アメリカ, ロサンゼルス, 農業, 経営→アメリカ,
伊豆味マツ	伊豆味孫次	妻	古我知	1891	1917	1891年1月, 生→1917年2月, 渡航, アメリカ, 夫の呼寄, アリゾナ州ｶ→1930年, フェニックスｶ→アメリカ, 死去
松田勇助	松田仁永	長男	古我知	1877	1903	1877年7月, 生→1903年, 渡航, アメリカ, 学術研究→1914年, アリゾナ州, 農園, 経営→1917年11月, 再渡航, アメリカ, 農業, アリゾナ州ｶ→アメリカ, 死去
松田仁吉	松田勇助	長男	古我知	1898	1916	1898年5月, 生→農学校中退→1916年2月, 渡航, アメリカ, 父の呼寄→フェニックス, 学生→ロサンゼルス, 南加大学, 学生→1929年, ロサンゼルス, 歯科医, 経営→1938年8月, ロサンゼルス, 死去
松田秀次	松田勇助	二男	古我知	1902	1919	1902年5月, 生→1919年7月, 渡航, アメリカ, 父の呼寄, 農業, アリゾナ州ｶ
大兼久新吉	大兼久喜平	弟	呉我	1890	1906	1890年9月, 生→1906年12月, 渡航, ハワイ, 晩成移民, 農業→アメリカ
大兼久カナ	大兼久新吉	妻	呉我	1892	1912	1892年1月, 生→1912年12月, 渡航, アメリカ, 夫の呼寄
仲宗根亀進	仲宗根金八	三男	饒平名	1878	1905	1878年8月, 生→1905年1月, 渡航, ハワイ, 大陸殖民→アメリカ→1918年9月, 再渡航, アメリカ→アメリカ, 死去
仲宗根千代	仲宗根亀進	妻	饒平名	1901	1920	1901年12月, 生→1920年2月, 渡航, アメリカ, 夫の呼寄
玉城長次郎	玉城長助	三男	饒平名	1878	1906	1878年3月, 生→1906年10月, 渡航, ハワイ, 日本殖民, 農業→アメリカ→1928年4月, 再渡航, アメリカ, 家族訪問→アメリカ, 死去
金城金吾	金城亀助	長男	我部	1879	1903	1879年10月, 生→1903年5月, 渡航, アメリカ, 修学→1912年6月, 再渡航, アメリカ→アメリカ, 死去
金城ムタ	金城金吾	妻	我部	1887	1912	1887年11月, 生→1912年6月, 渡航, アメリカ, 夫に同行
金城亀助	金城亀助	戸主	我部	1855	1912	1855年7月, 生→1912年6月, 渡航, アメリカ, 長男に同行
松田仁之丞	松田仁助	長男	我部	1885	1905	1885年12月, 生→1905年7月, 渡航, ハワイ, 大陸殖民, 農業→アメリカ→1910年頃, インペリアルバレー, 農業, 経営→1912年2月, 再渡航, アメリカ, 農業→1912年, ヒーバー, 農園, 瓜, 労働→1914年, ヒーバー, 農園, 瓜, 労働, 退職→アメリカ, 死去
松田　米	松田仁之丞	妻	我部	1895	1912	1895年8月, 生→1912年2月, 渡航, アメリカ, 夫に同行
喜屋武良助	喜屋武良助	戸主	我部	1885	1906	1885年3月, 生→小学校教員→1906年2月, 渡航, ハワイ, 帝国殖民, 農業→カナダ, バンクーバー→アメリカ, ワシントン州, タコマカリヤンテー, 製材所, 鉄道会社, 労働→1916年7月, 帰郷→1919年4月, 再渡航, アメリカ, ラスベガス, サザンパシフィック鉄道, 機関車整備→1924年, 帰郷→1967年8月, 死去
喜屋武ハル	喜屋武良助	妻	我部	1900	1921	1900年6月, 生→1921年10月, 渡航, アメリカ, 夫の呼寄, ラスベガスｶ→1953年, 再渡航, アメリカ, 夫の呼寄
照屋秀光	照屋秀定	四男	我部	1886	1906	1886年3月, 生→1906年1月, 渡航, ハワイ, 帝国殖民, 農業→アメリカ→1917年12月, 再渡航, アメリカ→アメリカ, 死去
照屋カマデ	照屋秀光	妻	我部	1894	1917	1894年12月, 生→1917年12月, 渡航, アメリカ, 夫に同行
大城永保			我部			→アメリカ→アメリカ, 死去
大城加目	大城永保	女子	我部	1902	1919	1902年2月, 生→1919年4月, 渡航, アメリカ, 父の呼寄→アメリカ, 死去

注）　空欄は記載のみられないことを示す。

資料：北米沖縄県人史編集委員会編（1981），名護市史編さん委員会編（2008，2010）をもとに作成。

身の仲尾権次郎は，1914 年に一時帰郷し妻と同行して再渡航しており，1918 年に長男を呼寄せた。このように，最初の移住先への渡航から後続移民の渡航した年次まで 10 ～ 15 年程度の事例が多く，最も長くて田井等地区出身の仲尾善五郎の 19 年となっていた。なお，1908 年にハワイへ渡航した川上地区出身の平良宇志や，1916 年にハワイへ渡航した稲嶺地区出身の島袋庄寛，1925 年にペルーへ渡航した伊差川地区出身の翁長良彦と翁長　幸をはじめ，最初の移住先へ親や兄弟のつてで渡航し，アメリカ合衆国へ転航する事例もみられた。

3. 渡航後の行動

図 3 は，アメリカ合衆国本土における，羽地村出身者の行動を示したものである。まず，地区ごとの延べ移民数に注目すると，ロサンゼルス 12 人，インペリアルバレー 5 人，アリゾナ州 4 人，フェニックス 3 人，ヒーバー 2 人，エルセントロ 1 人，パサデナ 1 人をはじめ，カリフォルニア州南部からアリゾナ州西部にかけて多くの移民がみられた。また，サンフランシスコ 7 人をはじめ，カリフォルニア州北部にも移民がみられた。

次に，図 3 と表 1 をもとに，居住地や生業の展開に注目する。はじめに，1902 年に渡航した上間幸助や 1903 年に渡航した上間徳助をはじめ，早期の移民はサンフランシスコへ渡航する者が多かった。そして，上間幸助は 1906 年のサンフランシスコ大震災を契機にロサンゼルスへ移住し，レストランを経営した。1905 年にハワイ経由で渡航した仲村権五郎も，ロサンゼルスへ移住し，のちに法律事務所を経営した。

また，1907 年にメキシコへ渡航した古我知地区出身の伊豆味孫次は，アメリカ合衆国本土へ転航後，1908 年にはアリゾナ州にて農業を経営し，1930 年にはフェニックスを経由して，第二次世界大戦後はロサンゼルスにて農業を経営していた。古我知地区出身の松田勇助は，1903 年にアメリカ合衆国本土へ直接渡航し，1914 年にアリゾナ州にて農業を経営していた。また，1916 年に長男仁吉，1919 年に二男秀次を呼寄せ，仁吉はフェニックスやロサンゼルスで修学後，ロサンゼルスにて歯科医を経営した。このように，メキシコとアリゾナ州，カリフォルニア州南部の範囲内で繰り返し移住がみられた。そして，ペルーから移住しロサンゼルスでホテルを経営する翁長良彦と翁長　幸の夫婦や，1905 年に渡航しパサデナにて切花店を経営する真喜屋地区出身の大城善貞，エルセントロにてレストランを経営する平良盛栄をはじめ，当該地域には農業以外の自営業に従事する者もみられた。

一方，ハワイやカナダからアメリカ合衆国本土へ転航し，モンタナ州からワイオミング州，ネブラスカ州，コロラド州デンバーへ，鉄道工夫に従事しながら移住する事例が 4 人みられた。デンバーからさらに，ロサンゼルスやインペリアルバレーに移住し，農業を経

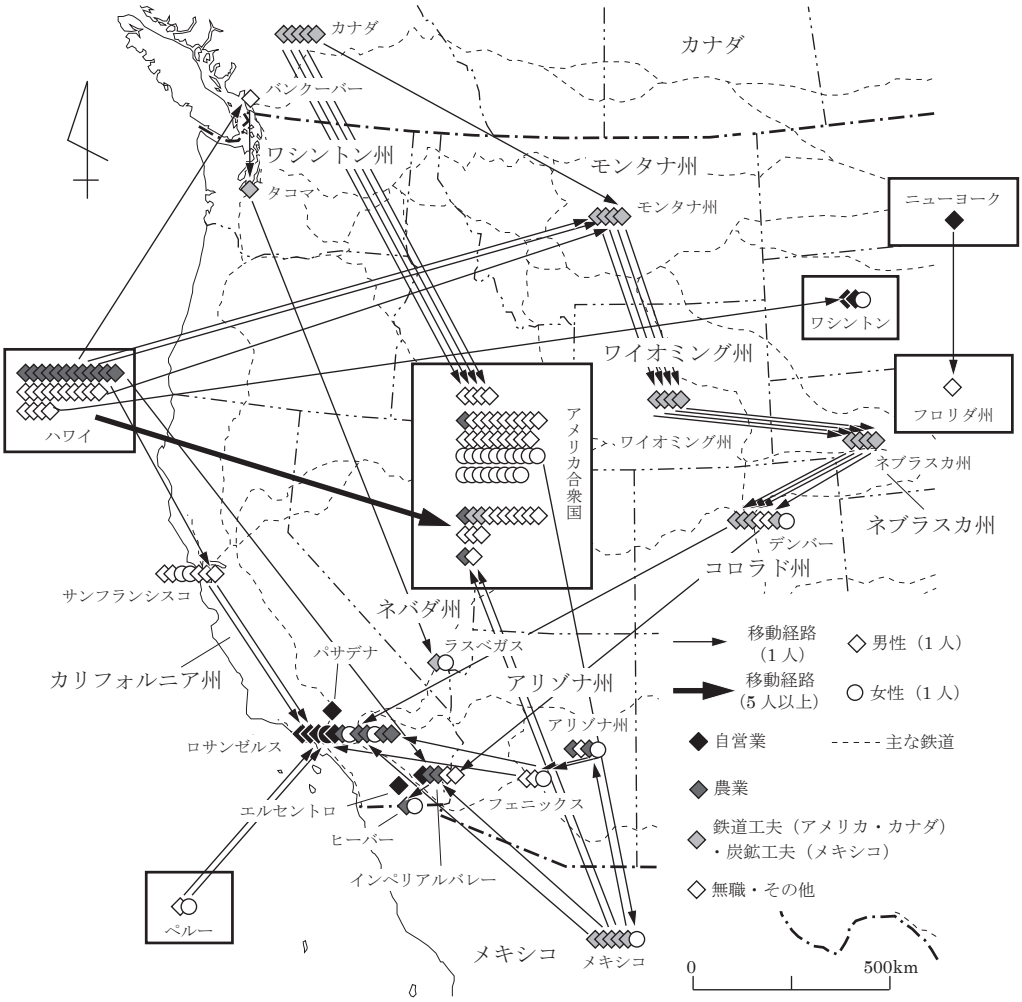

図3　アメリカ合衆国本土における羽地村出身者の行動

資料：北米沖縄人史編集委員会編（1981），名護市史編さん委員会編（2008，2010）をもとに作成。

営するという事例もみられた。また，喜屋武良助は，ハワイからバンクーバーを経由し，タコマで伐木労働となった後，ラスベガスで鉄道工夫に従事した。1917年に父の呼寄で渡航した真喜屋地区出身の平良覚吉は，日本人移民に特有の職種の1つであったガーデナーに従事し[29]，のちにワシントンへ移住して島袋庄寛の世話で食料品店を経営した。島袋庄寛は，ハワイからワシントンに移住し，航空学校の教員や農務官，電気器具店，周旋業，アパート経営等に従事した。このように，カリフォルニア州南部やアリゾナ州にとどまらない各地にて，居住地や職種を繰り返し変化させる事例が多数みられた。

4. 定住

最後に，移住先への定住の状況について，表 1 より帰郷者に注目すると，1924 年に我部地区の喜屋武良助，1930 年代に仲尾権次郎と，切花店を経営する平良覚吉の父である平良覚助の 3 人の帰郷が確認できたのみであった。一方，上間幸助は 1908 年にサンフランシスコ，上間徳助は 1912 年にサンフランシスコ，平良盛栄は 1932 年にエルセントロ，松田仁吉は 1938 年にロサンゼルス，仲村権五郎は 1965 年にロサンゼルスで死去した。さらに，1977 年 8 月現在における「北米沖縄系先亡者，戦没者法名簿」を参照したところ，表 1 に現れた移民のうち，51 人がアメリカ合衆国本土で死去していた [30]。つまり，アメリカ合衆国本土への移民は，ハワイをはじめ他地域への移民と同じく，帰郷者が少なく移住先への定住が多かった。

一方，1940 年代以降のアメリカ合衆国本土における羽地村出身者の居住地については，資料の存在が確認できないため詳細が判明しない。そこで，図 4 は，1966 年に作成された北米沖縄クラブの会員名簿をもとに，沖縄県出身者の居住地を示したものである [31]。北米沖縄クラブは，沖縄県出身者のアメリカ合衆国本土での移民コミュニティであるが，必ずしも沖縄県出身者全員が所属しているわけではない。また，事務局がロサンゼルス近郊のガーディナに位置するため，名簿に登場する会員の居住地はカリフォルニア州南部やその周辺に集中している。しかし，第二次世界大戦前まで継続する沖縄県からの移民送出の最終的な居住地の動向を把握する上で有効である。なお，北米沖縄クラブの会員名簿は，1961 年にも作成されている [32]。本稿では, 2 冊とも近接する年次に作成されていることと，より収録されている会員の多いことを考慮し，1966 年の会員名簿を用いて検討した。

図 4 より，居住者の多い地域に注目すると，1 位ロサンゼルス 344 人，2 位ガーディナ 39 人，3 位アズサ 29 人をはじめ，ロサンゼルス近郊に集中していた。また，フレズノ 5 人やサンフランシスコ 3 人をはじめカリフォルニア州北部や，フェニックスの北西に隣接するグレンデール 3 人をはじめアリゾナ州といった，近代の羽地村ないし沖縄県出身者の居住地にあたる地域にも多くの居住者がみられた。さらに，メヒカリ 2 人，エンセナーダ 1 人といった，メキシコにも少数ではあるが居住者がみられた。一方，近代に多くの羽地村ないし沖縄県出身者が移住していた地域の 1 つであるインペリアルバレー付近については，1966 年には居住者がみられなかった。背景には，第二次世界大戦に伴う沖縄県出身者を含む日本人の強制収容や，第二次世界大戦後に帰還が許可されたものの，従来借地による農業経営が多かったため再移住には至らなかったこと，少数の沖縄県出身者がトマト栽培を目的に移住したが，メキシコ産との競合により経営難となり追って転出したといった点がみられた [33]。

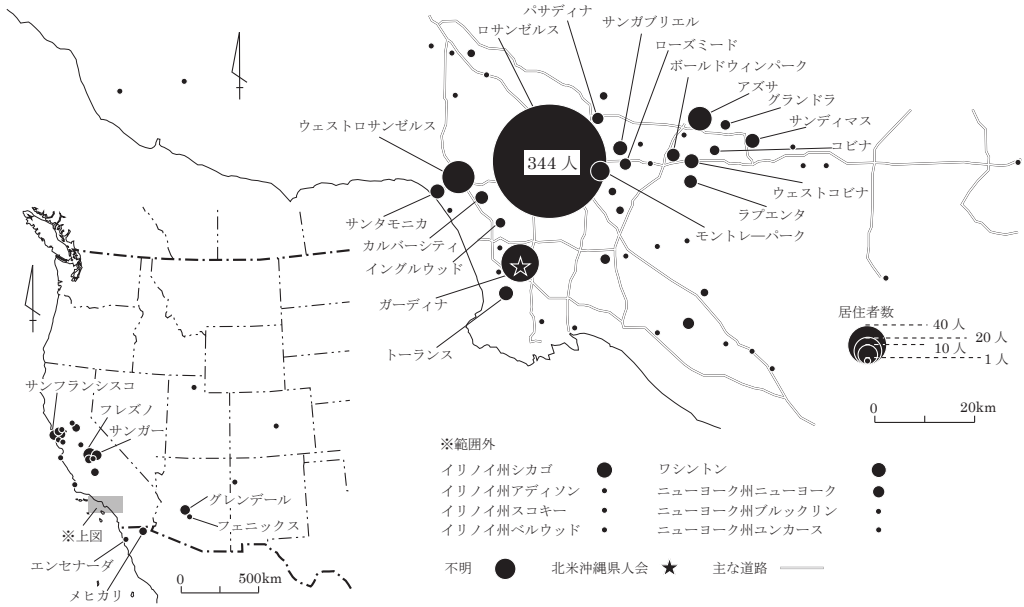

図 4　北米沖縄クラブ会員の居住地―1966 年―
資料：北米沖縄クラブ編（1966）をもとに作成。

Ⅳ．バスク地方出身のアメリカ合衆国本土への移民の行動

1．送出地域

バスク地方出身のアメリカ合衆国本土への移民について，バスク地方の一地域で作成された牧羊業経験者の行動記録を用いた検討もみられるが[34]，本稿ではおもにカルド・サン・セバスチャンによる『Basque in the United States』をもとに検討する[35]。この資料は，大西洋航路の乗船名簿やアメリカ合衆国の徴兵記録，死亡記録，埋葬記録，洗礼記録，ヨーロッパの移民代理店の名簿等をもとに，19 世紀から現在にかけてのアメリカ合衆国本土への移民 9,766 人分についての氏名や生年，渡航年次，渡航前後の行動を収録したものである。資料の制約上，移民により内容の精粗が大きく，収録のもれ等も考慮する必要があるが，アメリカ合衆国本土への移民の概要を把握する上で貴重である。

図 5 は，バスク地方からアメリカ合衆国本土へ，移住期間の長短に関わらず渡航経験のある移民数をまとめたものである。まず，バスク地方を構成する 7 領域別の移民数に注目すると，1 位はバスク自治州ビスカイア県 4,503 人，2 位ナバラ自治州 2,294 人，3 位低ナファロア地方 2,181 人，4 位スベロア県 346 人，5 位ラプルディ県 243 人，6 位バスク自治州ギプスコア県 175 人，7 位バスク自治州アラバ県 24 人となっていた。つまり，移民はビスカイア県と，ピレネー山脈を介して隣接するナバラ自治州および低ナファロア地方に集中していた。

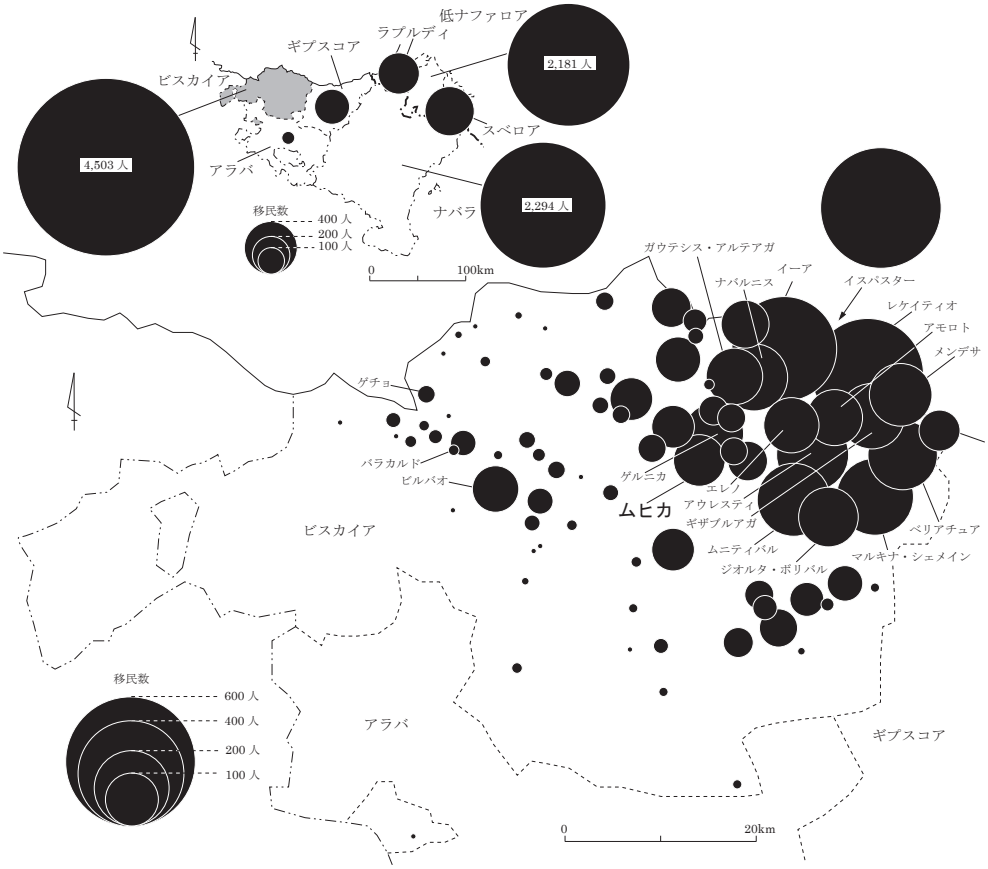

図 5　バスク地方とビスカイア県におけるアメリカ合衆国本土への移民数

資料：San Sebastian（2015a，2015b）をもとに作成。

次に，とくに移民数の多かったビスカイア県について，日本の市町村におおよそ相当するムニシピオ別の詳細に注目すると，1 位イスパスター 519 人，2 位レケイティオ 445 人，3 位イーア 392 人をはじめ, 15 のムニシピオで 100 人以上送出していた。これらはすべて，ビスカイア県北東部の沿岸地域や，その周辺の農山村地域に集中していた。一方，県都であるビルバオは 77 人，現在のビルバオ都市圏にありビスカイア県でも人口の多いバラカルドは 4 人, ゲチョは 11 人となっており, ビスカイア県西部の工業地域では移民が少なかった。本稿で対象とするムヒカは，ビスカイア県でも多出地域にあたる北東部に位置し，羽地村と同じく農牧業地域であり，羽地村と同規模の 95 人の移民がみられた。また，ビスカイア県北東部でも西端に立地し，北東部の港湾都市であるレケイティオ等と西部の県都かつ工業都市であるビルバオとのほぼ中間にあたる。ムヒカの地域間関係に注目すること

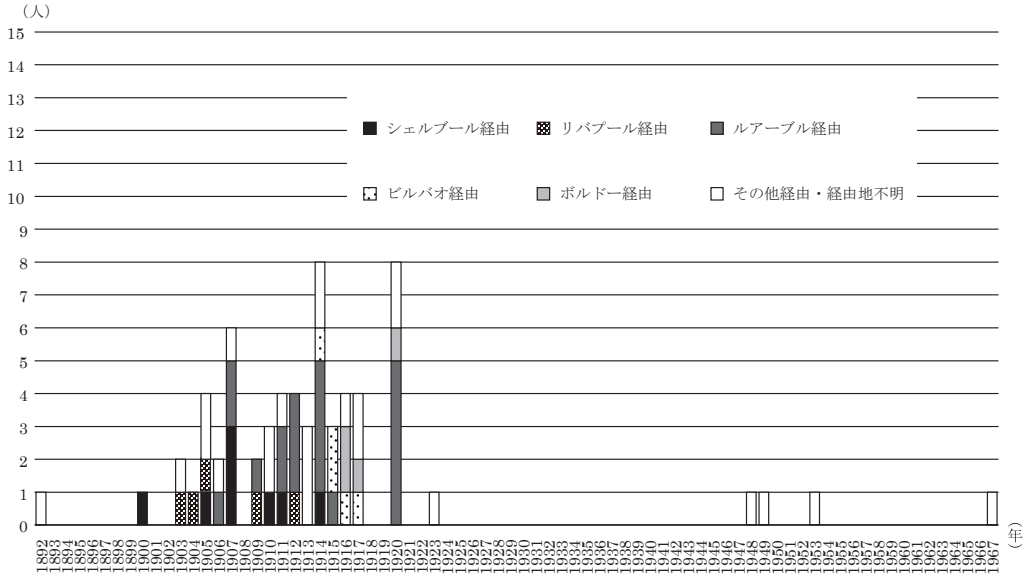

図 6　ムヒカ出身者の渡航年次

資料：San Sebastian（2015a，2015b）をもとに作成。

は，工業地帯でありながら海外へ移住した要因の検討に有効である。

図 6 は，ムヒカからアメリカ合衆国本土への移民 95 人のうち，渡航年次の判明した 65 人について，渡航年次をまとめたものである。図 6 より，ムヒカから最初のアメリカ合衆国本土への移民は，1892 年に渡航していた。また，1900 ～ 23 年を中心に移民がみられ，1914 年と 1920 年には 8 人，1907 年には 6 人と多かったが，おおよそ毎年数人ずつ平均的に送出されていた。1924 年に移民法が制定された後，移民はみられなくなった。しかし，1948 ～ 49 年と 1953 年，1967 年にも 1 人ずつ渡航しており，1937 年以降のスペイン内戦や 1973 年までのフランコ独裁政権に伴う生活の制約からの忌避との関わりが推察される。

2. 渡航前の行動

表 2 は，ムヒカ出身者の渡航前後の行動をまとめたものである。まず，渡航前の居住地に注目すると，ムヒカ地区 47 人，イバルリ地区 37 人，ゴロジカ地区 10 人，マウメ地区 1 人となっていた。また，イバルリ地区出身の Onaindia Jose Julian は渡航前にビスカイア県中部にあるイルエタ，Larrinaga Arguinchona Hilario はムヒカ南部にあるエチェアノ，Lejarcegui Seracina は結婚してムヒカの北部に隣接するゲルニカに移住していた。なお，表 2 に現れた移民 95 人のうち，女性は Lejarcegui Seracina を含め 3 人のみであり，92 人が男性となっていた。女性 3 人のうち 2 人が渡航前に結婚し，夫と同行して渡航したが，

表 2　アメリカ合衆国本土におけるムヒカ出身者の経歴

姓	ミドルネーム	名		地区	生年	渡航年次	経歴
Elorrieta		Roman		ムヒカ	1873	1892	1873年8月，生→1892年，渡航→サンフランシスコ，太平洋航路，船員→1910年，サンフランシスコ，ホテル管理人→1910年，酒屋，経営→紳士用品店，経営→1928年，グローブホテル，管理人→1930年，サンフランシスコ，Emilio Ezcurra'sホテル，事務→1940年代，ハワイやニューカレドニア，軍事輸送船→1945年2月，サンフランシスコ，死去
Arrien		Alejo	Basilio兄	ムヒカ	1882	1903	1882年7月，生→1903年3月，渡航，リバプール・ニューヨーク経由→ブランオー，牧場，経営→1920年，マウンテンホーム
Arrien		Basilio	Alejo弟	ムヒカ	1884	1903	1884年6月，生→1903年3月，渡航，ブルノー・ニューヨーク経由→1912年，再渡航，妻と同行→1918年，カーボン郡，羊飼い
Uriarte		Julian		ムヒカ	1883	1904	1883年，生→1904年2月，渡航，リバプール・ニューヨーク経由，エルコ
Elguezabal	Arbe	Agapito		ムヒカ	1878	1905	1878年8月，生→大工→1905年5月，渡航，シェルブール・ニューヨーク経由，バトルマウンテン，いとこのつて
Uruburu		Benito		ムヒカ	1875	1905	1875年，生→1905年12月，渡航，リバプール・ニューヨーク経由
Amesti		Matias		ムヒカ	1884	1906	1884年2月，生→1906年7月，渡航，ルアーブル・ニューヨーク経由，サンペドロ，知人のつて→船舶消防士→1925年，ウィルミントン→1930年，サンフランシスコ→1946年4月，ハイファ，航海中，死去
Lejarcegui		Miguel		ムヒカ	1882	1906	1882年，生→1906年，渡航
Laucirica		Pedro		ムヒカ	1890	1907	1890年，生→1907年3月，渡航，ルアーブル・ニューヨーク経由，ゴルコンダ→1910年、ホワイトロック，羊飼い
Olano		Andres		ムヒカ	1889	1907	1889年11月，生→1907年，渡航→1910年，ボイジー，羊飼い→1917年，バトルマウンテン，理髪店，経営→1930年，アージェンタ，紳士服店，経営
Solaegui		Rufino		ムヒカ	1885	1907	1885年，生→1907年，渡航，ルアーブル・ニューヨーク経由，ゴルコンダ→1910年，パラダイスバレー，羊飼い
Laucirica		Calixto		ムヒカ	1891	1911	1891年3月，生→1911年，渡航，ジャッククリーク，牧羊会社，労働→1917年，ツスカローラ，牧場，経営，単独→エルコ→1930年，エルコ，ラモイルにて，牛の世話，共同→1937年，エルコ，スターホテル，経営，1942年まで→1949年，ネバダホテル，経営→1979年12月，死去
Zabala		Vicente		ムヒカ	1873	1911	1873年，生→1911年4月，渡航，ルアーブル・ニューヨーク経由，ボイジー
Arrizabalaga	Ajuriagogeazcoa	Castor		ムヒカ	1893	1912	1893年3月，生→1912年3月，渡航，ルアーブル・ニューヨーク経由→1917年，リノ，ワショー郡北部にて，羊飼い→1920年，サンフランシスコ，カリフォルニア州にて，羊の世話
Bilbao		Ramon		ムヒカ	1896	1912	1896年，生→1912年3月，渡航，ルアーブル・ニューヨーク経由，ウィネマッカ
Madariaga		Jose	Santiago兄	ムヒカ	1891	1913	1891年，生→1913年，渡航→1920年，プエブロ，羊飼い，共同→1978年8月，ウィネマッカ，死去
Madariaga		Santiago	Jose弟	ムヒカ	1892	1914	1892年5月，生→1914年1月，渡航，ラブロック，いとこのつて→1917年，デニオ，羊飼い→1920年、プエブロ，羊飼い，兄Joseと共同→1922年1月，マウンテンホーム，結婚
Aguirre		Guy		ムヒカ	1897	1914	1897年3月，生→1914年，渡航→1918年，エルコ，羊飼い→1939年，ホーレック，大工，橋の建設
Ajuria		Luciano		ムヒカ	1896	1914	1896年，生→1914年3月，渡航，ルアーブル・ニューヨーク経由→メリースビル
Ascaray		Marcelino		ムヒカ	1894	1914	1894年6月，生→1914年3月，渡航，ルアーブル・ニューヨーク経由，エルコ，おじの雇用→1917年，マクダーミット，マルヒュー郡にて，羊飼い
Berrojalbiz		Leon		ムヒカ	1895	1914	1895年4月，生→1914年3月，渡航，ルアーブル・ニューヨーク経由→1930年，サター郡，羊飼い→1942年，サター郡，羊飼い→1943年11月，サター郡，死去
Ibarguengoitia	Echave	Antonio		ムヒカ	1784	1914	1894年9月，生→1914年11月，渡航，ビルバオ・ニューヨーク経由，ユタ州，知人のつて
Ajuria		Toribio		ムヒカ	1880	1917	1880年4月，生→1917年5月，渡航，ビルバオ・ニューヨーク経由，ボイジー→1918年，ツインフォールズ，労働
Aguirre		Eusebio	Manuel兄弟	ムヒカ	1902	1920	1902年，生→1920年2月，渡航，ルアーブル・ニューヨーク経由，ホワイトロック，兄弟Manuelのつて
Aldama		Caesarea		ムヒカ	1897	1920	1897年，生→1920年2月，渡航，ルアーブル・ニューヨーク経由，ショーショーン，弟のつて
Embeita		Bernardo		ムヒカ	1903	1920	1903年，生→1920年2月，渡航，ルアーブル・ニューヨーク経由，メリースビル，いとこのつて
Laucirica		Gregoria	Maria妹	ムヒカ	1884	1920	1884年，生→1920年7月，渡航，ルアーブル・ニューヨーク経由，サンフランシスコ，姉Mariaと同行，いとこ（ホテルTriartに滞在）のつて
Olano		Cosme		ムヒカ	1892	1920	1892年，生→1920年，渡航，ルアーブル・ニューヨーク経由，バトルマウンテン，いとこのつて
Lejarcegui		Jose Luis		ムヒカ	1942	1967	1942年9月，生→1967年4月，渡航→1972年，ボイジー→1974年，ウィネマッカ，結婚
Orbe		Francisco		ムヒカ			→渡航→1912年，マクダーミット
Laucirica	Echevarria	Jose		ムヒカ			→渡航→1913年，ツスカローラ，羊飼い
Urquiza		Damaso		ムヒカ	1888		1888年11月，生→渡航→1917年，キャッスルフォード，羊飼い→1971年1月，サンタアナ，死去
Barandica		Ignacio		ムヒカ	1892		1892年1月，生→渡航→1917年，ユーバ郡，農場，労働
Alberdi		Jacinto		ムヒカ	1894		1894年9月，生→渡航→1917年、ヒルトン，羊飼い
Ajuria		Jose		ムヒカ	1895		1895年2月，生→渡航→1917年，スタンベード，羊飼い
Azcuenaga		Castor		ムヒカ	1890		1890年6月，生→渡航→エルモア郡，羊飼い→1918年，ボイジー
Aldana	Leguineche	Prudencio		ムヒカ	1894		1894年3月，生→渡航→1918年，ビカボ，羊飼い→1920年，ルセーン，羊飼い→1941年，ショーショーン，結婚，Berriochoaボーディングハウス，経営→1942年，ルバート，バスクボーディングハウス，経営→1952年5月，死去
Uriarte		Felix		ムヒカ	1887		1887年，生→渡航→1924年，オグデン，羊飼い
Ajuriategui		David		ムヒカ	1898		1898年，生→渡航→1930年，トライアングル
Ajuria		Santiago	Lucio兄弟	ムヒカ	1892		1892年3月，生→渡航→1942年，メリースビル，労働，兄弟Lucio Ajuriaと同居
Beascoechea	Exposito	Damaso		ムヒカ	1907		1907年12月，生→渡航，プロビデンス，船員，逃亡→1942年5月，アイダホ州，羊飼い
Celaya		Felix		ムヒカ	1897		1897年，生→渡航→1948年、ツインフォールズ→1948年，バスク自治州，家族旅行
Orbe		Gererdo		ムヒカ	1898		1898年9月，生→渡航→クレーン，羊飼い
Embeita		Raimundo		ムヒカ	1899		1899年3月，生→渡航→ストックトン，羊飼い→1961年12月，サンホアキン，死去
Arguinchona		Jose		ムヒカ	1917		1917年4月，生→渡航→ネバダ州，労働→2001年6月，バスク自治州，死去
Artiach	Beascochea	Jose Maria		ムヒカ	1944		1944年11月，生→渡航→ハメット，羊飼い，4年間→マウンテンホーム，製材所，技師，トラック運転手，共同→1974年，結婚→1975年，ボイジー，運送会社，経営→バスクセンター長→2008年，バスクブロック，レクオナレストラン，経営
Embeita		Ciriaco		ムヒカ			→渡航→西部，羊飼い
Echevarria		Pedro		イバルリ	1881	1900	1881年3月，生→1900年，渡航，シェルブール・ニューヨーク経由，羊飼い→1918年、ボイジー→1930年，ソルジャースホーム，農場，経営
Arrazola		Segundo		イバルリ	1881	1905	1881年，生→1905年4月，渡航，オルタ・ニューヨーク経由，リノ
Celaya		Jose		イバルリ	1882	1905	1882年，生→1905年4月，渡航，オルタ・ニューヨーク経由，リノ
Elespe		Juan Bautista		イバルリ	1889	1907	1889年，生→1907年4月，渡航，シェルブール・ニューヨーク経由，サンフランシスコ，友人のつて

姓	ミドルネーム	名		地区	生年	渡航年次	経歴
Bicandi	Inchausti	Ciriaco	Thomas兄	イバルリ	1888	1909	1888年8月，生→1909年10月，渡航，リバプール・ニューヨーク経由→1910年，ボイジー，ゲストハウス，経営，1918年まで，スター近郊，農場，経営→1913年11月，ボイジー，結婚→1930年，プリーザントバレー→1953年，マーシング→1961年5月，死去
Bicandi		Thomas	Ciriaco弟	イバルリ	1898	1915	1898年1月，生→1915年5月，渡航，ビルバオ・ニューヨーク経由，ボイジー，兄Ciriacoのつて→1918年，ツインフォールズ，羊飼い→1920年，グランドビュー→ボイジー，牧場，経営→1972年1月，死去
Asqueta		Victor		イバルリ	1889	1910	1889年か1990年11月，生→1910年2月，渡航，シェルブール・ニューヨーク経由→1917年，ボイジー，羊飼い→1951年1月，キャニオン郡，死去
Bicandi	Rementeria	Eugenio		イバルリ	1882	1910	1882年，生→1910年，渡航→製粉所，労働→牧場，牛の世話→1920年，ボイジー→エメット→1925年，Bicandi'sボーディングハウス，夫婦で共同，経営
Berrojalbiz		Juan		イバルリ	1882	1911	1882年，生→1911年6月，渡航，シェルブール・ニューヨーク経由，パラダイスバレー，いとこのつて
Celaya		Felix		イバルリ	1892	1911	1892年，生→1911年3月，渡航，ルアーブル・ニューヨーク経由，リノ
Arriortua	Ipina	Petra		イバルリ	1887	1912	1887年10月，生→1909年，結婚→1912年，渡航，リバプール・ニューヨーク経由→1963年，ボイジー，死去
Arguinchona	Larrinaga	Luis		イバルリ	1896	1913	1896年4月，生→1913年10月，渡航，ニューヨーク経由，ボイジー，知人のつて→1917年、エメット，羊飼い→1918年10月，ボイジー，死去
Onaindia		Jose Julian		イバルリ	1896	1914	1896年4月，生→イルエタ→母死去→1913年，鉄道工夫，サンセバスチャン～イルエタ間→ブルゴス，兵役，2か月間→1914年，渡航，ニューヨーク，Valentine Aguirreのホテル経由，ショーショーン，羊飼い，兄のつて→1918年，マウンテンホーム，羊飼い→1919年，帰郷，結婚→1920年8月，再渡航，ツインフォールズ，妻と同行→1920年，ユタ州，鉱夫，1924年まで→1925年，ポートランド，伐木，労働，1927年まで→1928年，カスケード，伐木，労働→収入で帰郷できずも建家→1986年4月，カスケード，死去
Beguiristain		Tomas		イバルリ	1897	1915	1897年12月，生→1915年4月、渡航，ルアーブル・ニューヨーク経由，エルコ→1918年，リー，羊飼い→1932年4月，エルコ，結婚
Derteano		Tomas		イバルリ	1898	1915	1898年，生→渡航，ビルバオ・ニューヨーク経由
Aguirre		Dionisia		イバルリ	1894	1916	1894年，生→1916年12月，渡航，ボルドー・ニューヨーク経由，ボイジー，友人のつて
Barraincua		Calixto	Saturnino兄弟	イバルリ			→渡航→1916年，ボイジー
Barraincua		Saturnino	Calitxo兄弟	イバルリ	1888	1916	1888年，生→1916年3月，渡航，バルセロナ・ニューヨーク経由，ボイジー，兄弟Calixtoのつて
Zallo		Victoriano		イバルリ	1897	1916	1897年11月，生→1916年3月，ボルドー・ニューヨーク経由，渡航→1917年，エルコ，ファロンにて，土地会社，羊飼い
Asqueta		Maximum		イバルリ	1888	1917	1888年3月，生→渡航→1917年，ジョーダンバレー，マルヒュー郡にて，牧羊会社，羊飼い
Derteano		Hilario		イバルリ	1893	1917	1893年，生→1917年4月，渡航，ボルドー・ニューヨーク経由，リノ
Onaindia		Ignacio		イバルリ	1894	1917	1894年10月，生→渡航→1917年，カリー，羊飼い
Arguinchona	Larrinaga	Hilario		イバルリ	1900	1920	1900年2月，生→1920年2月，渡航，ニューヨーク経由，羊飼い→1934年，ボイジー，結婚→1939年，バーテンダー→1945年，ボイジー，デラマールームズ，経営，1961年まで，同時期，ボイジー市公園課，勤務→1969年9月，死去
Larrinaga	Arguinchona	Hilario		イバルリ	1900	1920	1900年2月，生→エチェアノ→1920年2月，渡航，ボルドー・ニューヨーク経由，羊飼い→ボイジー，労働→1934年2月，結婚→1969年9月，死去
Berrojalbiz		Juan Jose		イバルリ	1901	1923	1901年7月，生→1923年4月，渡航ニューヨーク経由→1929年10月，ボイジー，結婚→1955年，コードウェル，農夫→1983年12月，ボイジー，死去
Torrealday	Barruetabena	Gregory		イバルリ	1895	1948	1895年4月，生→1948年4月，渡航，ダックウォーター，羊飼い
Barroetabena		Jesus		イバルリ	1929	1949	1929年3月，生→1949年3月，渡航，エルコ，羊飼い
Lejarcegui		Seracina		イバルリ	1931	1953	1931年11月，生→1952年10月，ゲルニカ，結婚→1953年2月，渡航→1965年，グランドビュー
Echaniz	Guisasola	Pedro Bonifacio		イバルリ	1881		1881年1月，生→渡航→1901年，ボイジー，羊飼い
Barroetabena		Gregorio		イバルリ	1885		1885年4月，生→渡航→1911年，コパーベイジン，木の彫刻，1915年まで→1917年，マウンドバレー，羊飼い→1948年，コパーベイジン，羊飼い
Beascoechea		Alejandro		イバルリ	1892		1892年5月，生→渡航→1915年，ボイジー，羊飼い→1942年，グランドビュー，羊飼い
Muguira	Orue	Jose		イバルリ			→渡航→1915年，ボイジー，羊飼い
Barraincua		Ecaristo		イバルリ	1879		1879年，生→渡航→1917年、ボイジー
Arrazola		Candido		イバルリ	1885		1885年1月，生→渡航→1918年，ストックトン，パン職人→1942年，労働→1973年11月，死去
Zallo		Ramon		イバルリ	1896		1896年8月，生→渡航→1918年，ゴールドクリーク，羊飼い
Arandia	Belaustegui	Lorenzo		イバルリ	1899		1899年，生→渡航→1920年，バトルマウンテン，羊飼い
Lejarcegui		Jose Luis		イバルリ	1944		1944年4月，生→渡航→1979年，コードウェル
Aguirre		Domingo		ゴロジカ	1889	1907	1889年8月，生→1907年3月，渡航，シェルブール・ニューヨーク経由，ボイジー，羊飼い→1918年，ボイジー
Uberuaga		Cirilo		ゴロジカ	1890	1907	1890年，生→1907年11月，渡航，シェルブール・ニューヨーク経由，ボイジー→1917年，インディアンバレー，羊飼い→1920年，クナ，スワンフォールズにて，水力発電所，労働，バスク人10人と共同
Alegria		Joaquin		ゴロジカ	1880	1909	1880年，生→1909年3月，渡航，ルアーブル・ニューヨーク経由，オグデン，いとこのつて
Aguirre		Francisco	Anastasio兄	ゴロジカ		1910	1898年以前，生→1910年，渡航，アイダホ州，羊飼い→弟AnastasioやAlejandroを呼寄
Aguirre		Anastasio	Francisco弟 Alejandro兄	ゴロジカ	1893	1912	1893年9月，生→1912年3月，渡航，ルアーブル・ニューヨーク経由，マウンテンホーム，兄Franciscoのつて→1918年，エルコ，羊飼い
Aguirre		Alejandro	Francisco弟 Alejandro弟	ゴロジカ	1898	1914	1898年3月，生→1914年3月，渡航，シェルブール・ニューヨーク経由，兄Franciscoのつて→1918年，ボイジー→1919年，ソルトレークシティ，羊の世話人
Aguirre	Errecacho	Francisco		ゴロジカ	1891	1913	1891年6月，生→1913年，渡航，ボイジー，マウンテンホーム，羊飼い→オワイイ一郡，羊飼い，単独→1918年，ボイジー→1921年，ツインフォールズ，アイダホ電力会社，勤務→1942年，ポカテロ→1962年4月，ツインフォールズ，死去
Aldana	Jayo	Joseph		ゴロジカ	1899	1916	1899年3月，生→1916年6月，渡航，ビルバオ・ニューヨーク経由，ホテル経営者Valentin Aguirre（ニューヨーク）やPrudencio Mendiola（ショーショーン）のつて→1918年，ショーショーン，牛の世話→1930年，アイダホフォールズ，皮商→1980年1月，死去
Atucha		Eusebio		ゴロジカ	1891		1891年8月，生→渡航→1917年，オグデン，労働
Onaindia	Uriguen	Ciriaco		ゴロジカ	1890		1890年3月，生→渡航→1918年，ボイジー，グランドビューにて，羊飼い
Urriolabeitia		Perdo		マウメ	1901	1920	1901年7月，生→1920年4月，渡航，ニューヨーク経由，羊飼い，鉱夫，建築労働→1935年7月，ポカテロ，結婚→1947年，ボイジー，ボイジーブレーキ電源，夫婦で共同，経営，1968年まで→1986年3月，死去

注）　空欄は記載のみられないことを示す。
資料：San Sebastian（2015a，2015b）をもとに作成。

男性については 92 人のうち 1 人が一時帰郷して結婚し，9 人が渡航後アメリカ合衆国本土にて結婚した。男性の結婚相手は，姓からバスク地方出身の女性と推察される者や，バスク地方出身の女性とは考えにくい者が混在しており，ムヒカ出身の女性は確認できなかった。

渡航前の生業に注目すると，1905 年に渡航したムヒカ地区出身の Elguezabal Arbe Agapito は大工，1914 年に渡航したイバルリ地区出身の Onaindia Jose Julian は渡航前年の 1913 年にサンセバスチャンとイルエタ間の鉄道工夫に従事していた。2 人以外については，渡航前の生業が確認できなかったが，農牧業地域であることを踏まえ，本人ないし家族が農牧業に従事していたと推察される。

次に，血縁関係等のつてによる渡航について，相手の属性が判明した事例に注目すると，いとこ 7 人，兄弟姉妹 7 人，友人 2 人，知人 2 人となっていた。たとえば，ゴロジカ出身の Aguirre 兄弟は，1910 年に兄 Francisco が渡航してアイダホ州へ移住し，1912 年に 1 人めの弟 Anastasio をアイダホ州マウンテンホームへ呼寄せ，1914 年に 2 人めの弟 Alejandro も呼寄せた。また，1920 年に渡航したムヒカ地区出身の Laucirica Gregoria のように，兄弟姉妹の同行により渡航した事例も 1 人みられた。1914 年に渡航したムヒカ地区出身の Ascaray Marcelino は，移住後にネバダ州エルコでおじに雇用されていた。さらに，1907 年に渡航したゴロジカ地区出身の Uberuaga Cirilo は，1920 年にアイダホ州スワンフォールズにて，バスク地方出身者 10 人と共同で水力発電所の建設労働に従事していた。つまり，血縁関係や地縁関係，友人関係が，渡航や移住後の行動を選択する上で重要な契機となっていた。

続いて，図 6 と表 2 より，渡航前の経由地に注目すると，フランス北部にありイギリス海峡に面したルアーブル 19 人，シェルブール 8 人，ブーローニュ 1 人，イギリス中西部のリバプール 5 人をはじめ，フランスやイギリスの港湾都市を経由する者が 1900 年から 1920 年にかけて多くみられた。一方，ビスカイア県の県都でありビスケー湾に面したビルバオ 5 人，同じくビスケー湾に面したラプルディ地方と低ナファロア地方，スベロア地方を管轄するフランスのアキテーヌ地方にあるボルドー 4 人，地中海に面したスペイン第 2 の都市バルセロナ 1 人のように，バスク地方や周辺地域の港湾都市を経由する者は大西洋側であっても少なかった。ビルバオについては 1914 ～ 17 年，ボルドーについては 1916 ～ 20 年に渡航がみられ，後年には経由地となっていた。しかし，1914 年にはシェルブール経由 1 人，ルアーブル経由 4 人，1920 年にはルアーブル経由 5 人がおり，ビルバオやボルドー経由のみられた時期においてもフランスやイギリスの港湾都市を経由する者の比重が大きかった。なお，大西洋の中央部にある，ポルトガル領アゾレス諸島のオルタを経由した事例も 2 人みられた。つまり，ムヒカと同じビスカイア県にあるビルバオを経

由して渡航することも可能であったが，ルアーブルをはじめフランスやイギリスの港湾都市を経由して渡航する経路が主流となっていた。

3. 渡航後の行動

図 7 は，アメリカ合衆国本土における，ムヒカ出身者の行動を示したものである。まず，地区ごとの延べ移民数に注目すると，アイダホ州ボイジー 29 人，エルコ 8 人，マウンテンホーム 6 人をはじめ，アイダホ州南部からネバダ州北部に集中していた。居住地の多くは，大陸横断鉄道の沿線に分布していた。また，ネバダ州リノ 5 人やサンフランシスコ 5 人をはじめ，ネバダ州北西部からカリフォルニア州北部にも移民がみられた。

次に，居住地や生業の展開に注目すると，表 2 に現れた 95 人中，牧羊業に従事した者が 50 人みられた。また，牧羊業の経営者となった者が 4 人みられた。たとえば，1915 年

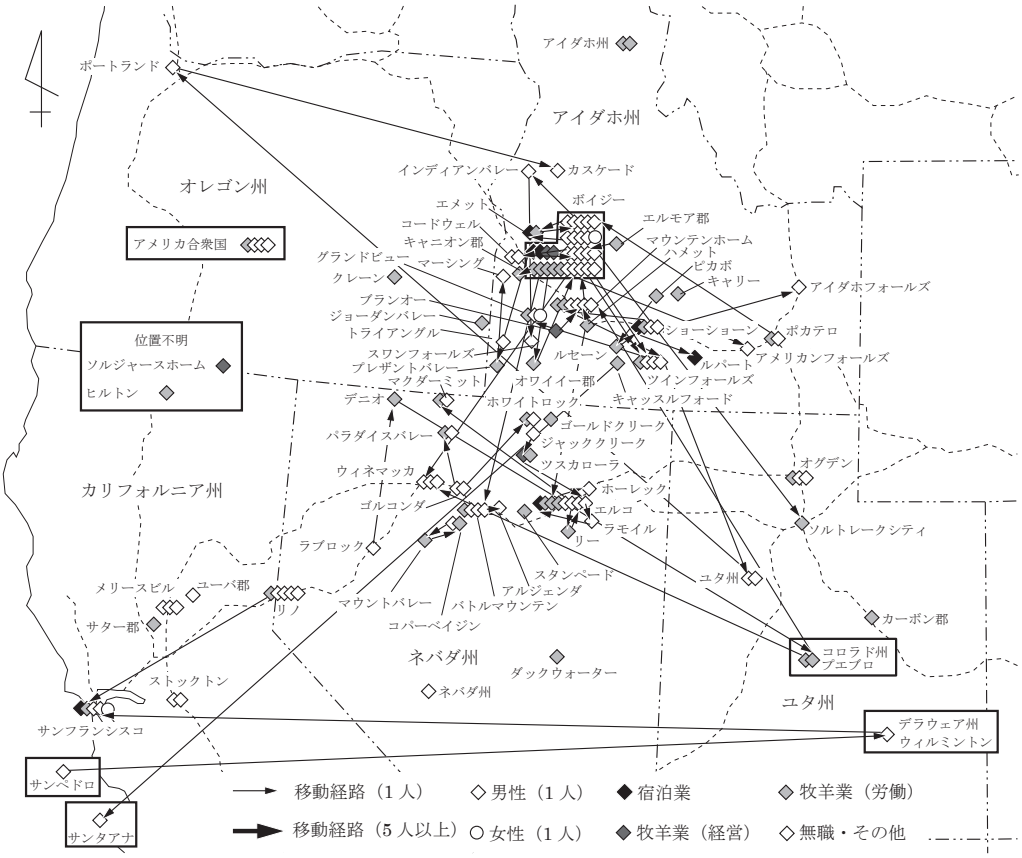

図 7　アメリカ合衆国本土におけるムヒカ出身者の行動

資料：San Sebastian（2015a，2015b）をもとに作成。

に兄 Ciriaco のつて渡航したイバルリ地区出身の Bicandi Thomas は，ボイジーから 1918 年にアイダホ州ツインフォールズへ移住して羊飼いとなり，1920 年にはアイダホ州グランドビューを経てボイジーへ移住し，牧羊業の経営者となった。

また，彼の兄 Bicandi Ciriaco は，1909 年に渡航し 1910 年にボイジーへ移住してゲストハウスや農場を経営し，1930 年にアイダホ州プリーザントバレー，1953 年にアイダホ州マーシングへ移住した。Ciriaco に限らず，ムヒカ地区出身の Aldana Leguineche Prudencio は，1918 年よりアイダホ州ピカボやアイダホ州ルセーンにて羊飼いに従事し，1941 年にはアイダホ州ショーショーン，1942 年にはアイダホ州ルパートにてボーディングハウスを経営していた。1911 年に渡航したムヒカ地区出身の Laucirica Calixto は，ネバダ州ジャッククリークで羊飼いに従事後，1917 年にネバダ州ツスカローラで牧羊業を経営し，1930 年にエルコ近郊のネバダ州ラモイルで牛の世話を行った後，1937 年よりエルコでスターホテルやネバダホテルを経営していた。つまり，ムヒカ出身者の多くは，アイダホ州南部からネバダ州北部の範囲内を中心に繰り返し移住しながら，牧羊業の労働から牧羊業の経営ないし宿泊業へ展開していった。

なお，ボーディングハウスやホテルをはじめとする宿泊業の役割について（図 8），ムヒカ地区出身の Laucirica Gregoria は，サンフランシスコの Triart ホテルに滞在するいとこのつてで渡航しており，イバルリ地区出身の Onaindia Jose Julian やゴロジカ地区出身の

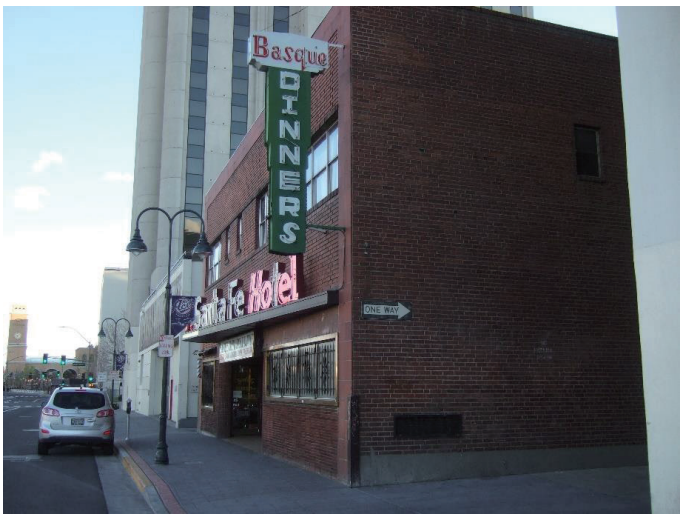

図 8　バスクホテルの例（リノ・サンタフェホテル）

1929 年に開業し，リノ駅前に立地する。現在はバスク料理のレストランとなっており，1 階にはダンスホール，2 階には客室の跡が残る。Laucirica Calixto が一時経営したエルコのスターホテルやネバダホテルについては，Echeverria（1999）151 ～ 155 頁，に詳しい。

2016 年 3 月 22 日　著者撮影

Aldana Jayo Joseph は渡航後にニューヨークにて Valentin Aguirre の経営するホテル等に滞在していた。これらの宿泊業は，牧羊業の労働者の一時的な滞在先や，最終目標となる移住先へ行く途中の移民の滞在先として，重要な役割を果たしていた。また，表 2 では確認できなかったが，これらの宿泊業にはバスク地方出身の女性が雇用され，牧羊業に従事するバスク地方出身の男性と結婚する事例もみられた[36]。

一方，ネバダ州北西部やカリフォルニア州北部へ移住した移民に注目すると，ムヒカから最初の移民であり，1892 年という 1890 年代に渡航した唯一の移民であるムヒカ地区出身の Elorrieta Roman は，渡航後にサンフランシスコへ移住して太平洋航路の船員となり，その後ホテル管理人や酒屋，紳士用品店の経営等に従事したことは注目される。また，ムヒカ地区の Amesti Matias は，1906 年にロサンゼルス近郊にあるカリフォルニア州サンペドロに居住する知人のつてで渡航し，船舶消防士に従事しながらアメリカ合衆国東海岸にあるデラウエア州ウィルミントンやサンフランシスコに移住し，航海中にイスラエルのハイファで死去した。つまり，表 2 では資料的制約のため少数しか確認できないが，Ⅱ章で検討した植民政策の一環で中南米へ船員として渡航した事例とは特性が異なるものの，アメリカ合衆国本土への移民についても初期には船員に従事する者がみられた。

4. 定住

最後に，移住先への定住の状況について検討する。表 2 より帰郷者に注目すると，ムヒカ地区出身の Arguinchona Jose は，ネバダ州へ移住後，2001 年にバスク自治州にて死去した。また，ムヒカ地区出身の Celaya Felix は，1948 年にバスク自治州へ家族旅行した。イバルリ地区出身の Onaindia Jose Juan は，1919 年に帰郷して結婚し，1920 年には妻と同行して再渡航した。その後，ユタ州にて鉱夫や，オレゴン州ポートランドやアイダホ州カスケードにて伐木の労働に従事して蓄財し，帰郷を希望したが実現せず，その財を活用してカスケードに家屋を建て，1986 年 4 月に同地で死去した。つまり，表 2 に現れた 95 人のうち, 完全に帰郷した事例は 1 人のみであり, 一時帰郷についても 2 人しか確認できなかった。ただし，Jose Juan の事例にみえるに，帰郷の意思があったものの実現しなかったという側面もみられた。一方, アメリカ合衆国本土にて死去した者は, 20 人確認できた。さらに，ムヒカ地区出身の Artiach Beascochea Jose Maria は，渡航後にアイダホ州ハメットにて羊飼いやマウンテンホームにて製材所の労働に従事し，1975 年よりボイジーにて運送会社を経営した。また, バスクセンター長を歴任し (図 9), 2008 年よりボイジーのバスクブロック（図 10）にてレクオナレストランを経営している（図 11)。これらの点を踏まえ，バスク地方出身者の多くはアメリカ合衆国本土に定住したことや，ムヒカ出身者の中にはアメリカ合衆国本土の移民コミュニティで重要な役割を果たす者もみられた。

図 9　バスクセンター（ボイジー・バスクブロック）
資料：2015 年 7 月 31 日　著者撮影

図 10　ハイアルディで賑うバスクブロック（ボイジー）
街頭にはイクリニャ（バスク民族旗），道路にはラウブル（バスク十字）が装飾されている。
2015 年 7 月 31 日　著者撮影

ムヒカからの移民がみられなくなる 1960 年代以降のアメリカ合衆国本土における，ムヒカ出身者の居住地については，資料的制約から詳細が判明しない。そこで，図 12 は，アメリカ合衆国の統計より，最初に「バスク人」の項目が登場する 1980 年に注目し，アメリカ合衆国中部や西部における州別のバスク出身者や彼らの血統をもつ者の居住地を

図 11　レクオナレストラン（ボイジー・バスクブロック）
資料：2015 年 7 月 31 日　著者撮影

示したものである[37]。なお，この資料では，集計方法について，「少なくとも 1 つの祖先集団」[38] と「片親の祖先集団」[39]，「両親の祖先集団」[40] に区分されている。また，項目について，「スペイン系バスク人」と「フランス系バスク人」，「バスク人（系統不明）」の 3 つがみられた。本稿で対象としたムヒカはビスカイア県に属するため，「スペイン系バスク人」の項目に注目したいが，多くの州で大半が「バスク人（系統不明）」と記されており，系統別の人数を検討する上で数値の信頼が困難である。本稿では，資料上もっとも人数の多かった, わずかでもバスク出身者の血統をもつ「少なくとも 1 つの祖先集団」の区分を扱い, 3 つの項目の人数を合計し, あくまで分布の傾向把握を試みた。図 12 より，居住者の多い州に注目すると，1 位カリフォルニア州 15,530 人，2 位アイダホ州 4,332 人，3 位ネバダ州 3,378 人となっており，ムヒカ出身者の移住先と同じアイダホ州やネバダ州，カリフォルニア州に集中していた。また，図 12 に示した範囲にて，アメリカ合衆国の総計 43,140 人中 34,903 人がみられ，8 割以上がアメリカ合衆国本土の中部や西部に居住していた。

また，図 12 には，NABO[41] やバスククラブの資料[42] をもとに，1980 年までに設立されたバスククラブの位置も示した。アメリカ合衆国本土で最初のバスククラブは，1913 年にニューヨーク州ブルックリンに設立されたものであり，1980 年時点で図 12 の範囲外にあるものはこの 1 か所のみであった。その後，1944 年にはカリフォルニア州ベーカーズフィールド, 1946 年にはカリフォルニア州オンタリオ, 1947 年にはオレゴン州オンタリオ,

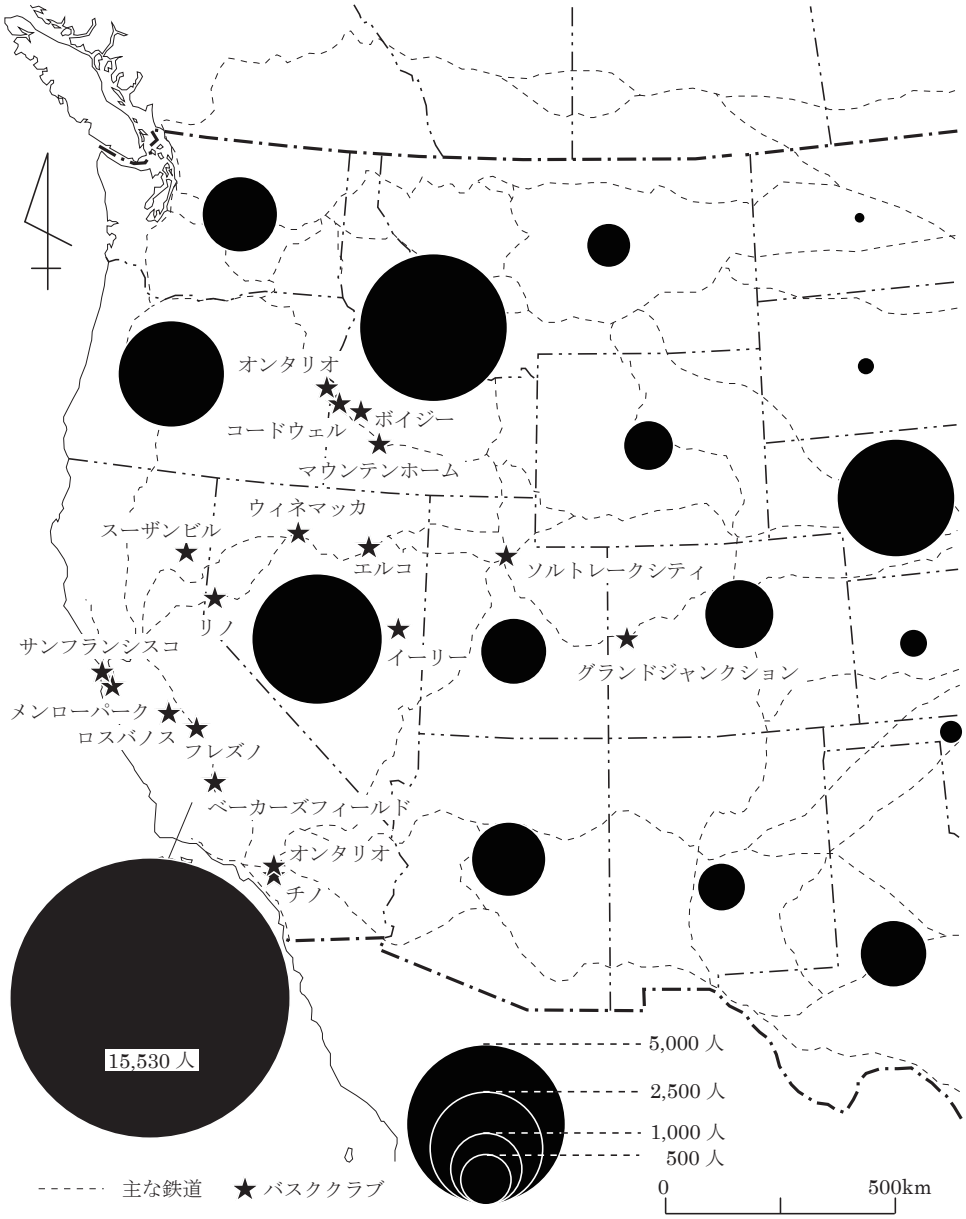

図 12　アメリカ合衆国本土中部から西部における「バスク人」の居住地—1980 年—

資料：U. S. Department of Commerce Bureau of Census（1983）をもとに作成。

1949 年にはボイジー，1954 年にはネバダ州ウィネマッカをはじめ，アイダホ州南部からネバダ州北部周辺やカリフォルニア州北部に集中して設立されていった。

Ⅴ．おわりに

本稿は，国頭郡羽地村とビスカイア県ムヒカを対象として，近代における沖縄県とバスク地方からアメリカ合衆国本土への移民を事例に比較検討を行い，送出に至った歴史的経緯や渡航前後の移民の行動の特性を明らかにしようとした。

沖縄県では，1889 年よりアメリカ合衆国本土へ移住がはじまり，1899 年よりハワイやメキシコ，カナダ等からの転航や，1910 年代以降は後続移民がみられ，1924 年の移民法や第二次世界大戦の影響で減少した。一方, バスク地方では, 1840 年代のゴールドラッシュに伴い先行する移住先であった中南米より転航がみられ，1860 年代以降は大陸横断鉄道の開通に伴いバスク地方から直接渡航し牧羊業等に従事する移民が増加し，1924 年の移民法や 1934 年のテイラー放牧法の影響を受けながらも，1937 年のスペイン内戦から 1973 年のフランコ独裁政権の終焉まで継続した。

渡航前後の移民の行動について，羽地村とムヒカに注目すると，渡航年次は羽地村が 1902 ～ 26 年であり，1900 年代と 1910 年代以降に 2 つの送出のピークがみられた。ムヒカは 1890 ～ 1967 年にかけて平均的に送出しており，スペイン内戦やフランコ独裁政権に伴う生活の制約からの忌避により長期間送出がみられた。渡航前の生業について，羽地村は初期の移民には教員や自由民権運動に従事した者が多くみられた。ムヒカは大工や鉄道工夫，農牧業に従事する者が大半となっていた。渡航の斡旋について，羽地村では 1900 年代には移民会社の斡旋により渡航していた。ムヒカはビルバオを経由することも可能であったが，フランスやイギリスの港湾都市を経由する者が大半となっていた。また，渡航の際のつてについて，羽地村は男性が移住後 10 ～ 15 年を経てから，一時帰郷して結婚し妻子を同行して再渡航するか，妻子を呼寄せており，これが 1910 年代以降の移民送出のピークに関わっていた。ムヒカは送出地域で結婚し同行する事例や妻子を呼寄せる事例は少なく，いとこや兄弟，友人等のつてで渡航し，現地でムヒカ出身者以外の女性と結婚するため，移民のほとんどが男性であった。渡航後の居住地や生業について，羽地村は 1900 年にアメリカ合衆国本土へ直接渡航することが禁止されていたため，ハワイやメキシコ，カナダから転航し，カリフォルニア州南部やアリゾナ州に移住して，農業労働者から農業経営者や自営業者へ展開した。ムヒカは，アイダホ州南部やネバダ州北部，カリフォルニア州北部へ移住し，これらの範囲内を繰り返し移動しながら，牧羊業の労働者から経営者，宿泊業へ展開し，初期には船員となる者がみられた。定住や帰郷の状況について，羽地村とムヒカともに帰郷者は少なく，多くがアメリカ合衆国本土へ定住した。

つまり，沖縄県とバスク地方からのアメリカ合衆国本土への移民の特性について，2 地域とも送出期間の長短や，居住地や生業に若干の相違はみられるものの，おおよそ 19 世紀末から 20 世紀初めにかけて，農牧業をはじめ出稼ぎ目的から自営業へ展開し，帰郷せ

ず定住していったことが共通してみられた。一方，相違点として，沖縄県では本土出身者による社会･経済の抑圧の反動として，自由民権運動の担い手が移民のキーパーソンとなっており，多くが後続移民として妻子を呼寄せた。これらの点が，後発ながら日本有数の多出地域へ展開した一因となった。また，バスク地方では，植民政策の一環で中南米へ船員として渡航した事例とは特性が異なるものの，アメリカ合衆国本土でも初期には船員となる者がみられ，ビルバオではなくフランスやイギリスの港湾都市を経由して渡航する者が多かった。つまり，あくまでビスカイア県の場合ではあるが，北東部の港湾都市と農牧業地域との間に交通や労働力の提供をはじめ密接な地域間関係がうかがわれ，西部の工業地域とは区分されていたことが，バスク地方では工業地域でありながら工業に従事するのではなく海外へ移住することを選択した一因と推察された。

今後の課題として，ビスカイア県およびバスク地方における移民送出の詳細について，送出地域ごとの渡航前後の移民の行動に注目し，工業地域でありながら工業に従事するのではなく海外へ移住することを選択した要因についてより検討を深める必要がある。また，北米だけでなく中南米への移民にも注目し，沖縄県とバスク地方における移民送出の特性について比較検討を進める必要がある。

付記

本稿は, 2015（平成 27）年度琉球大学中期計画達成プロジェクト（戦略的推進経費）「文化共有集団による越境的ネットワークの国際比較研究――ウチナーンチュとバスク人をめぐって――」（研究代表者：金城宏幸琉球大学教授）に基づく研究成果の一部である。

注

1）①石川友紀「第三章　海外移民の展開」（沖縄県教育委員会編・発行『沖縄県史　第 7 巻　各論編 6　移民』, 1974）, 207-230 頁。②石川友紀『日本移民の地理学的研究』榕樹社, 1997，311-350 頁。

2）石川友紀「ハワイにおける初期沖縄県移民一世の歴史地理学的考察」史学研究 136, 1977，59-85 頁。

3）①石川友紀「北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究――ハワイ一世移民の現地調査事例を中心に（Ⅰ）――」移民研究 9，2013，41-62 頁。②石川友紀「北米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究――ハワイ一世移民の現地調査事例を中心に（Ⅱ）――」移民研究 10，2015，43-68 頁。

4）前掲 1)，230-243 頁。

5）北米沖縄人史編集委員会編『北米沖縄人史』北米沖縄クラブ，1981，7-8 頁。

6）前掲 5)。

7）石丸哲史「アメリカ合衆国における沖縄県出身者に関する地理学的検討――移動･定着･同化のプロセスと企業経営――」沖縄地理 6，2003，1-13 頁。
8）花木宏直「近代首里の文教都市化に及ぼす移民の役割」移民研究 10，2015，23-42 頁。
9）山下靖子「第二章　沖縄移民社会　第三節　北米・ハワイ」（沖縄県文化振興会史料編集室編『沖縄県史　各論編　第五巻　近代』沖縄県教育委員会，2011），386-401 頁。
10）花木宏直「明治中～後期の沖縄県における移民会社業務代理人の経歴と属性」沖縄地理 13，2013，2 頁。
11）萩尾　生・吉田浩美編『エリア・スタディーズ 98　現代バスクを知るための 50 章』明石書店，2012，94 頁。
12）斎藤　功「インペリアルバレーにおけるヒツジのアルファルファ畑放牧」立教大学観光学部紀要 11，2009，25-38 頁。
13）斎藤　功「カリフォルニア州カーン郡における羊の長距離移牧の継続」地理空間 7-1，2014，3-31 頁。
14）石井久生「バスク系羊飼いによるバスク地方とアメリカ合衆国西部間の移住行動――ナバラ州バスタンの羊飼いの事例――」共立国際研究 31，2014，37-61 頁。
15）石井久生「トランスナショナル社会空間における結節点としてのバスク・ホテル――ベーカーズフィールドとボイジーの事例――」共立国際研究 32，2015，43-70 頁。
16）漆原和子「ピレネー山脈バスク地方（フランス）のヒツジの放牧」法政大学文学部紀要 66，2012，31-39 頁。
17）①竹中克行「スペインの国内人口移動に関する時空間分析（1962-1993 年）――1970 年代における移動パターンの変化をめぐって――」地学雑誌 105-1，1996，31-52 頁。②竹中克行『多言語国家スペインの社会動態を読み解く――人の移動と定着の地理学が照射する格差の多元性――』ミネルヴァ書房，2009，31-66 頁。
18）萩尾　生「バスク『地域主義』における国内移民の存在――新たなバスク・アイデンティティの模索――」地域研究 7，1989，72-95 頁。
19）前掲 11），96 頁。
20）①石川友紀「第一章　総説」（沖縄県教育委員会編・発行『沖縄県史　第 7 巻　各論編 6　移民』, 1974）, 1-87 頁。②前掲 1 ）②。③金城　功「第一章　沖縄移民の経緯」（沖縄県文化振興会史料編集室編『沖縄県史　各論編　第五巻　近代』沖縄県教育委員会，2011），333-346 頁。
21）①湧川清栄『沖縄民権の挫折と展開――当山久三の思想と行動』太平出版社，1972。②大里康永『平良新助伝』大同印刷，1969。
22）①前掲 10）。②花木宏直「東洋移民業務代理人・肥後孫左衛門の経歴と明治中～後期の沖縄県における海外移民の斡旋」琉球大学教育学部紀要 84，2014，69-81 頁。
23）①渡部哲郎『バスク　もう一つのスペイン　改訂増補版』彩流社，1987。②渡部哲郎

『バスクとバスク人』平凡社，2004。③前掲 11)。

24）① Kaldo San Sebastian，*Basque in the United States Volume 1 Araba, Bizkaia, Gipuzkoa*，Center of Basque Studies University of Nevada，Reno，2015a。② Kaldo San Sebastian，*Basque in the United States Volume 2 Ipparalde and Naffaroa*，Center of Basque Studies University of Nevada，Reno，2015b。③ Jeronima Echeverria，*Home away from home: A history of Basque boardinghouse*，University of Nevada Press，1999。

25）沖縄県教育委員会編･発行『沖縄県史　第 7 巻　各論編 6　移民』, 1974, 付表 20-25 頁。

26) 名護市史編さん委員会編『名護市史本編･5　出稼ぎと移民　別冊　資料編』名護市役所，2010。

27）①前掲 5)。②名護市史編さん委員会編『名護市史本編・5　出稼ぎと移民Ⅱ　出稼ぎ＝移民編（上)』名護市役所，2008。③前掲 26)。

28）前掲 5)，662 頁。

29）①矢ヶ崎典隆「北カリフォルニアにおける日系人花卉栽培の形成――民族的組織化と移民農業――」地学雑誌 89-3，1980a，149-166 頁。②矢ヶ崎典隆「北カリフォルニアにおける日本人花卉栽培業の変貌――社会的・文化的・技術的・地域的変化におけるひとつの民族産業――」人文地理 32-1，1980b，23-46 頁。

30）前掲 5)，851-852 頁。

31）北米沖縄クラブ編・発行『沖縄系人名住所録』，1966。

32）北米沖縄クラブ編・発行『沖縄系人名住所録』，1961。

33）前掲 5)，510-511 頁。

34）前掲 14)。

35）①前掲 24）①。②前掲 24）②。

36）前掲 24）③，36-61 頁。

37）U. S. Department of Commerce Bureau of Census，*1980 Census of Population Ancestry of the Population by State: 1980 Supplementary Report*，1983。

38）前掲 37)，15-32 頁。

39）前掲 37)，33-50 頁。

40）前掲 37)，51-68 頁。

41）NABO ホームページ（http://www.nabasque.org/, 2016 年 2 月 5 日閲覧）より,「Members」を参照した。

42）バスククラブホームページ（http://www.euskaletxeak.net/, 2016 年 2 月 5 日閲覧）より，バスククラブの検索システムを参照した。

（はなき　ひろなお・琉球大学教育学部講師・歴史地理学）

The Characteristics of Immigrants from Okinawa Prefecture and Basque Country to the United States in Modern:

Direct Comparisons between Haneji Village, Kunigami County and Muxika, Bizkaia Province

HANAKI Hironao

Faculty of Education, University of the Ryukyus

（Historical Geography）

Key words：Emigration, Democrat, Seaman, Chain Migration, Settlement

This article showed historical courses of immigration and actions of immigrants before or after they immigrated from Okinawa prefecture or Basque Country to the United States in modern. Using historical data of immigration, comparisons were made between Haneji Village in Kunigami County, Okinawa prefecture and Muxika in Bizkaia Province, Basque Country, which had common characteristics with respect to agricultural area and number of immigrants.

Immigrants from Okinawa began immigrating directly to the United Sates as early as 1889. After the Gentleman's Agreement in 1908, direct immigration stopped, and new arrivals found entrance via Hawaii, Mexico, and Canada. With the introduction of the Immigration Act of 1924 and the advent of World War Ⅱ, Japanese immigration effectively stopped.

In constant, in Basque Country, there were immigrants to the United States via Central and South America as a result of the Gold Rush of the 1840s and the opening of transcontinental railways in 1860s. Additional causes of Basque immigration to the United States include the Immigration Act of 1924, the Taylor Grazing Act of 1934, and the start of the Spanish Civil War in 1937 until the end of the Franco autocracy in 1973.

Subsequently, this article looked to Haneji and Muxika for a comparison of historical courses of immigration and actions of immigrants before or after they emigrate. In Haneji, there were immigrants from 1902 to 1926, with two peaks of emigration―one in the 1900s and the other after the 1910s. In Muxika, there were emigrants consistently from 1890 to 1967, much longer than in Haneji, largely due to the Spanish Civil War and Franco autocracy. In Haneji, some of the early emigrants were teachers or democrats before they emigrated because they resisted politicians or business owners of the Japanese mainland from 1880 to 1890s. Furthermore, Haneji experienced chain migration. In Muxika, most of the emigrants were carpenters, railroad workers, and farmers before they emigrated. In Haneji, during the 1900s, immigration brokers were on the rise. In

Muxika, many of those who left opted not to depart from Bilbao but rather, via Bilbao as via ports in France or England. In Haneji, males emigrated either with their wives and children or called them 10-15 years after they first emigrated. In Muxika, people took advantage of contacts like cousins, brothers, or friends and married women from the United States who did not hail from Muxika. After immigration, those from Haneji settled in southern California or Arizona and converted their profession from farm workers to farmers or business owners. Immigrants from Muxika settled primarily in south Idaho, north Nevada or northern California and converted their profession from sheepherders to sheep ranchers, hotel owners, or seamen. Many of the immigrants from Haneji and Muxika did not return home, opting to settle in the United States.

Therefore, immigrants from Okinawa and Basque Country to the United States commonly came to earn money via the agriculture or sheep industries and settled in the United States as business owners during the late 19th and early 20th centuries.